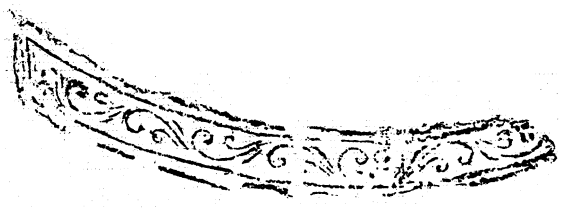
三　重　県　鈴　鹿　市

伊勢国分寺・国府跡

－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告－



１９９４．３

鈴鹿市教育委員会

例　　言

1. 本書は三重県鈴鹿市国分町に所在する伊勢国分寺跡 (第 6 次) 及び同広瀬町に所在する伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）（第 2 次）の発掘調査報告書である。現地調査は 1993 年 9 月 13 日から 1994 年 2 月 28 日までである。

2. 調査箇所及び調査面積は次のとおりである。なお、調査区名には従来字名を用いてきたが本年度は、地区割に従い記号で表すこととした。

(遺跡名)		(調査区名)	(所在地)	(調査面積)
[伊勢国分寺跡]	国分西遺跡	6BFE-A	(鈴鹿市国分町西浦 258 番地)	120 ㎡
		6BFC-C	(鈴鹿市国分町西浦 255 番地)	128 ㎡
		6BFC-F	(鈴鹿市国分町西浦 251 番地)	90 ㎡
	国分遺跡	6BGH-C	(鈴鹿市国分町北条 1324 番地)	19 ㎡
	伊勢国分寺跡	6BIB-A-1	(鈴鹿市国分町西高木 224 番地)	82 ㎡
		6BIB-A-2	(鈴鹿市国分町西高木 224 番地)	60 ㎡
[伊勢国府跡]	長者屋敷遺跡	6AHI-F	(鈴鹿市広瀬町字仲起 1226 番地)	62 ㎡
		6AJA-A-1	(鈴鹿市広瀬町字矢下 1134 番地)	38 ㎡
		6AJA-A-2	(鈴鹿市広瀬町字矢下 1134 番地)	33 ㎡
		6AJA-A-3	(鈴鹿市広瀬町字矢下 1137 番地)	18 ㎡
		6AJA-D	(鈴鹿市広瀬町字矢下 1140 番地)	32 ㎡
		6AJD-A	(鈴鹿市広瀬町字矢下 1141 番地)	55 ㎡

3. 発掘調査は平成 5 年度国庫補助金 (国宝重要文化財等保存整備費補助金) 及び県費補助金 (埋蔵文化財緊急調査補助金) を得て、以下の調査体制で行った。

調査主体　　鈴鹿市教育委員会教育長　市川年夫

調査指導　　八賀晋 (三重大学人文学部教授) 考古学
足利健亮 (京都大学総合人間学部教授) 歴史地理学
渡辺寛 (皇學館大学文学部教授) 古代史
高瀬要一 (奈良国立文化財研究所)
仲見秀雄 (鈴鹿市文化財調査会会長)
文化庁
三重県教育委員会文化振興課
三重県埋蔵文化財センター

調査担当
鈴鹿市教育委員会文化財保護課
石井平 (課長) 中森成行 (係長) 松井剛・清山健・藤原秀樹・新田剛 (調査担当)
森　久弥・水野智江子（庶務担当）
(発掘作業) 国分町・木田町・山辺町・広瀬町・加佐登町・岡田町の皆さん
(室内整理) 浅野和歌子・加城陽子・杉本恭子・真鈴川千津子

4．遺構記号は下記の通りであり、番号は遺跡ごとに第 1 次調査からの連番である。
SB; 建物跡、SC; 廊、SD; 溝、SK; 土壙、SX; その他遺構
5．座標は国土座標第 VI 系、方位はすべて座標北を用いている。
6．本調査にかかる遺物及び図面、写真等はすべて当教育委員会で保管している。
7．本書の編集執筆は新田剛が担当した。
8．調査及び報告書の作成に際し、上記指導の先生方のほか以下の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。(敬称略 50 音順)
浅尾悟・伊藤克幸・井上和人・上原真人・大川清・小笠原好彦・岡田登・小澤毅・河原純之・木下良・小玉道明・駒田利治・齊藤孝正・巽淳一郎・谷本鋭次・寺崎保広・沼田茂・松村恵司・村山邦彦・山沢義貴・山田猛・山中敏史

本　　文

Ⅰ．前言 …… 1
Ⅱ．伊勢国分寺跡の調査 …… 3
Ⅲ．伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）の調査 …… 19
Ⅳ．まとめ …… 51

挿　　図

第１図　周辺の遺跡 …… 2
第２図　伊勢国分寺跡発掘区（縮尺１/5 千） …… 4
第３図　伊勢国分寺跡調査区（縮尺 1/200） …… 5
第４図　ＳＫ 22（縮尺 1/40）…… 7
第５図　SB09 ～ 13（縮尺 1/100） …… 8
第６図　丸瓦（縮尺 1/4） …… 10
第７図　平瓦（縮尺 1/4）…… 11
第８図　平瓦（縮尺 1/4）…… 12
第９図　軒丸瓦（縮尺 1/4） …… 14
第 10 図　軒丸瓦･軒平瓦（縮尺 1/4） …… 15
第 11 図　軒平瓦（縮尺 1/4） …… 16
第 12 図　鬼瓦･土器･石器（縮尺 1/4） …… 17
第 13 図　長者屋敷遺跡発掘区（縮尺 1/5 千） …… 20
第 14 図　長者屋敷遺跡調査区（縮尺 1/200） …… 21
第 15 図　伊勢国府政庁建物配置図（縮尺 1/ 千）…… 23
第 16 図　SB03・SC01（後殿及び軒廊）（縮尺 1/100）…… 24
第 17 図　SB04・SD07（北東建物）（縮尺 1/100）…… 25
第 18 図　SD05 遺物出土状況･土層断面（縮尺 1/40） …… 26
第 19 図　SD04・06・07 土層断面（縮尺 1/40） …… 27
第 20 図　基壇版築土層断面（SB03）（縮尺 1/20）…… 28
第 21 図　丸瓦（縮尺 1/4） …… 30
第 22 図　平瓦（縮尺 1/4） …… 31
第 23 図　平瓦（縮尺 1/4）…… 32
第 24 図　平瓦（縮尺 1/4）…… 33
第 25 図　平瓦（縮尺 1/4）…… 34
第 26 図　平瓦（縮尺 1/4）…… 35
第 27 図　平瓦（縮尺 1/4）…… 36

第 28 図　平瓦（縮尺 1/4）　…… 37
第 29 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 38
第 30 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）…… 39
第 31 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）…… 40
第 32 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）…… 41
第 33 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 43
第 34 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 44
第 35 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 46
第 36 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 47
第 37 図　軒平瓦（縮尺 1/4）…… 48
第 38 図　土器･石器（縮尺 1/4）　…… 50
第 39 図　伊勢国分寺跡地区表示（縮尺 1/5 千）…… 55
第 26 図　長者屋敷遺跡地区表示（縮尺 1/5 千）…… 56

写　　真

写真 1　伊勢国分寺跡調査区全景　6BFE-A　6BFC-C　6BFC-F
写真 2　6BGH-C　6BIB-A-1・2　SK22 遺物出土状況　SK22
写真 3　SB09　SB10　SB11・12　SB13
写真 4　伊勢国府跡政庁近景　6AHI-F　6AJA-A-1（軒廊）
　　6AJA-A-2（後殿）
写真 5　6AJA-A-3　6AJA-D　6AJD-A　SD04
写真 6　SC01 遺物出土状況　SC01　軒廊･後殿接合部　SB03 地覆
写真 7　SB03（後殿）断ち割り　SB03 断面　SD07 遺物出土状況
写真 8　SD05 遺物出土状況　SD05 軒瓦出土状況（6AJA-D）
　　SD05 軒瓦出土状況（6AJA-D）　SK02
写真 9　伊勢国分寺跡出土遺物　（1）
写真 10　伊勢国分寺跡出土遺物　（2）
写真 11　長者屋敷遺跡出土遺物　（1）
写真 12　長者屋敷遺跡出土遺物　（2）

Ⅰ．前　　言

1. 過去の調査経緯

(1) 伊勢国分寺跡

1922 年に国の史跡に指定され、半世紀以上経過した 1988 年に初めて考古学的な調査が開始された伊勢国分寺跡の発掘調査も本次をもって第 6 次を数える。僧寺跡と考えられている史跡指定地の範囲確認は早くも第 2 次調査で完了し、東西 178m、南北 184m の築地跡が想定されるに至った。第 3 次調査以降、調査の主眼は尼寺の解明へ移された。尼寺跡の所在は以前から国分町字南浦地内とされ、尼寺跡推定地として標柱が設置されるなど確たる根拠がないにもかかわらず半ば定説化していた。第 3 次調査では尼寺に関連する成果は得られなかったが、その報告において伊勢国分寺跡出土軒瓦の型式分類が試みられた (浅尾 1991)。

調査区の大部分を尼寺跡推定地に設けた第 4 次調査では白鳳期の瓦が多く出土し、南院の地における前身寺院の存在はほぼ確実となった。加えて報告では国分町光福寺境内の碑文を引用し、「北院」すなわち現在の国分町集落内を尼寺跡の候補地としている (浅尾 1992)。ただし、前身寺院の関連遺 = 構及び範囲の確認と尼寺跡の検出さらには白鳳寺院と尼寺との関係などは以後の課題として残された。続く第 5 次調査では谷上 1 地区にて検出された 2 条の溝を前身寺院の東築地跡と判断、併せて集落排水事業に伴う立会調査の所見も加味して東西 95m、南北 110m の寺域を想定し、天平期の瓦が多数出土する現国分町の中心集落付近すなわち「北院」を尼寺跡として積極的に位置づけている (浅尾 1993)。

こうした経緯をふまえ、前身寺院の範囲確認、尼寺の所在及び範囲確認を今年度の重点課題として調査に着手することになった。ただし、南院については調査希望箇所が水田として利用されているところが多いことから地権者の承諾が得られず、調査区の設定は断念せざるを得なかった。そこで、今回は尼寺の確認に重点を置きつつ寺域外関連施設の検出をも考慮して後述する 6 か所の調査区を設定した。

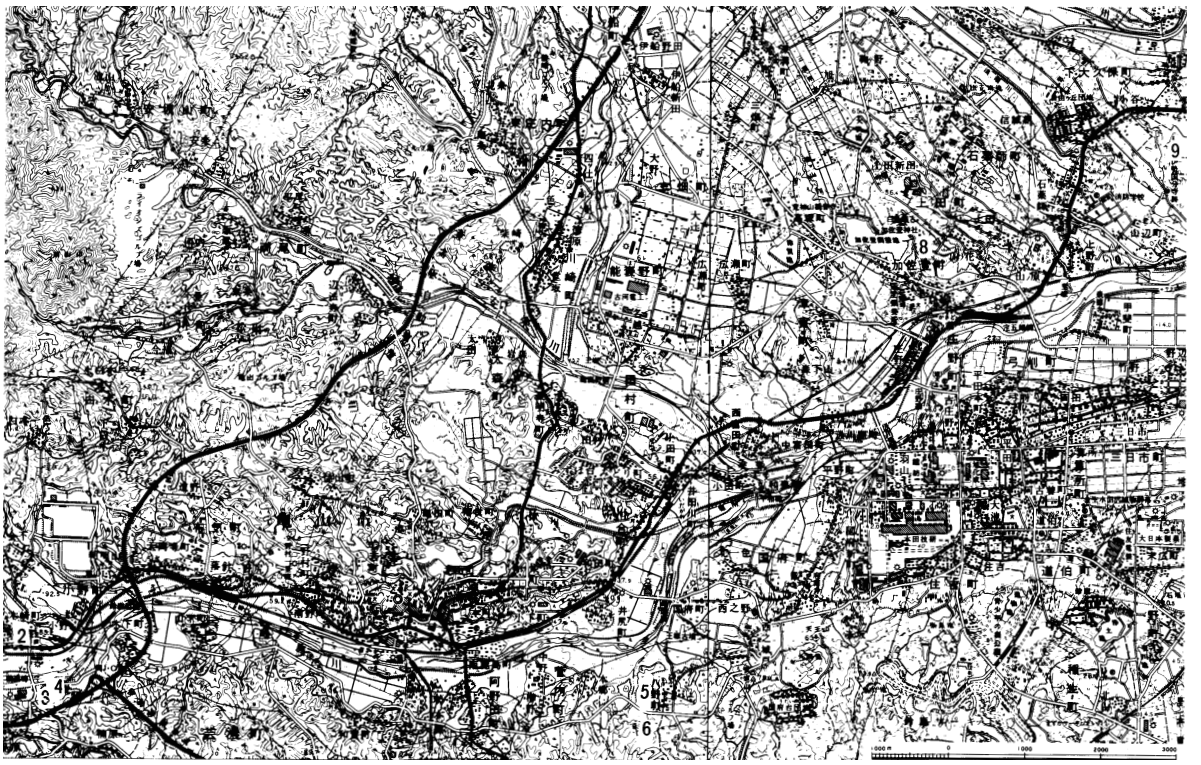
(2) 長者屋敷遺跡

古くから古代の瓦が大量に散布するところとして知られてきた。1957 年に藤岡謙二郎氏によって歴史地理学的な調査が実施され、とくに瓦が密集し、かつ、基壇状の高まりを呈する 2 箇所については一部発掘調査も実施された。「A 地点」では礎石建物が検出され、「南端建物趾」とされる「B 地点」では山林内に残る基壇状遺構の形態に着目し、付近の土層の堆積状況が観察されている。これらの調査結果に基づき、軍団を兼ねた初期国府跡との見解が示され、B 地点については「羅城的性格を備えたもの」と考えている (藤岡・西村 1997)。藤岡氏の先駆的な調査にもかかわらず、とくに積極的な保護措置が取られることもなく、亀山市域側と鈴鹿市域側の一部に工場の進出を招き今日に至っている。

鈴鹿市教育委員会では 1992 年度からようやく発掘調査の実施にこぎつけたわけである

が、それとほぼ時を同じくして村山邦彦氏による現地踏査のレポートが公表された。氏は遺物の分布及び土壇・土塁等の痕跡をもとに遺跡の性格を考察している。過去に藤岡氏が「B 地点 (南端建物趾)」とした山林内に残る基壇状の高まりについては近江国庁の建物配置との類似を指摘し、天平勝宝年間の中心的な建物であったと述べている (村山 1992)。「B 地点」を政庁と考える点においてはすでに『国立歴史民俗博物館研究報告』第 10 集 (阿部他 1986) で指摘されているところでもある。市教委による第 1 次調査では遺物が集中散布する 3 箇所に調査区を設け、うち 1 箇所は藤岡氏の「A 地点」における礎石建物の再検出を試みたものである。報告では「C 地点」を政庁域の有力候補としながらも「B 地点」の可能性をも指摘している (浅尾 1993)。

こうした過去の調査研究に依拠しながら、今回は藤岡氏による「南端建物趾」を調査対象とし、後述の 6 か所に調査区を設定した。



第 1 図　周辺の遺跡（縮尺 10 万分の 1）

1. 長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）　2. 推定鈴鹿関　3. 萩原裏ノ山遺跡　4. 古厩遺跡
5. 八野遺跡　6. 八野瓦窯跡　7. 国府城跡　8. 川原井瓦窯跡　9. 伊勢国分寺跡

Ⅱ. 伊勢国分寺跡の調査

1. 検出遺構

【６ＢＦＥ－Ａ】

調査地点は西の史跡指定地 (推定僧寺跡) と現国分町の中心集落に挟まれた浅い谷地形を成し、瓦が多量に散布することが知られていた。第 4・5 次調査で現集落内における寺域の存在が提起されたことを受けて、その西辺の検出を見込み、調査区を設定した。

平安時代の瓦廃棄土壙 9 基、掘立柱建物 2 棟、鎌倉時代の溝などが検出された。瓦廃棄土壙は切り合い関係及び埋土の様子から、少なくとも時期差のある 2 群に分けられる。

SBO9　掘立柱建物。梁行 2 間で 4.4m、N60°E。SK22 より新しい。柱穴内からの出土遺物は瓦のみで、遺構の時期を示す遺物は含まれていなかった。

SB10　掘立柱建物。梁行 2 間で 4.6m、N20°E。SK14・21・22 より新しい。SBO9 同様遺構の時期を示す遺物はない。

SK15・16・21・22・23・26・27　不整形の瓦廃棄土墳である。一番規模の大きい SK22 で南北 9.2m、検出面からの深さ 0.6m を測る。SK15・16 は残りが悪く皿状を呈し、鎌倉時代の溝 SD53・54 に切られる。SK23 は SK26 に切られる。いずれも奈良時代の瓦類を多く含み、奈良時代以降の土器を少量伴うが、埋没年代は 11 世紀末頃と考えられる。

SK14・20　不整円形ないし楕円形の瓦廃棄土壙で、径 1.4 ～ 2.4m、深さ 0.1 ～ 0.3m である。埋没時期は SK15・16・21・22・23・26・27 より新しく、鎌倉時代の埋没が考えられる。いずれも奈良時代の瓦類を多く含む。SK14 は瓦とともに炭化物・焼土を多く含む。

SD53・54・59・71・74　幅 0.7 ～ 1.7m、深さ 0.1 ～ 0.3m。SD54 は SD53 より新しく、座標方位に一致し、発掘区南端から約 12m の地点で東へ 90 度折れ曲がる。SD74 は SK21・27 より新しく、SD71 は SK26 より新しい。概ね鎌倉時代の埋没が考えられる。

SD60　幅 0.8m、深さ 0.1m。SD71 より新しいが時期は特定できない。

【6 ＢＦＣ -- Ｃ】

6BFE-A から西へ約 90m、推定僧寺跡から東へ続く微高地上に位置する。ピットの集中する部分を一部拡張した。鎌倉時代の掘立柱建物 2 棟と溝が検出された。

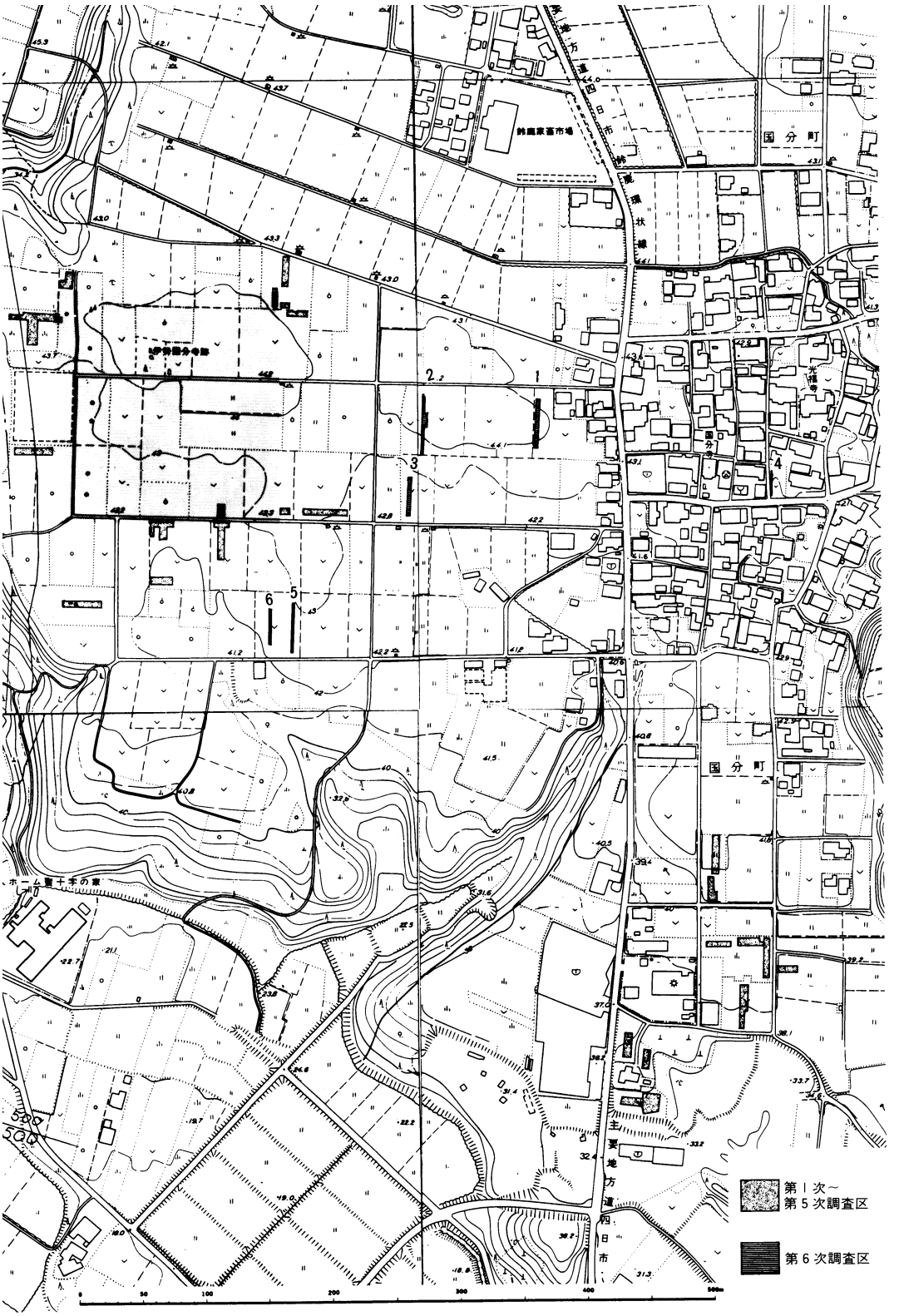
SB11　掘立柱建物。桁行 5 間で 10.7m、NO°。拡張部分の調査結果から発掘区東へ続くものと考えられるが、やや不整形となるため疑問が残る。鎌倉時代の埋没が考えられる。

SB12　掘立柱建物。南北 3 間で 7.3m、N30°W。SB11 と重なるが前後関係は不明。鎌倉時代の埋没が考えられる。

SD55・56・57・58　いずれもほぼ東西に延びる溝である。掘立柱建物より新しい。

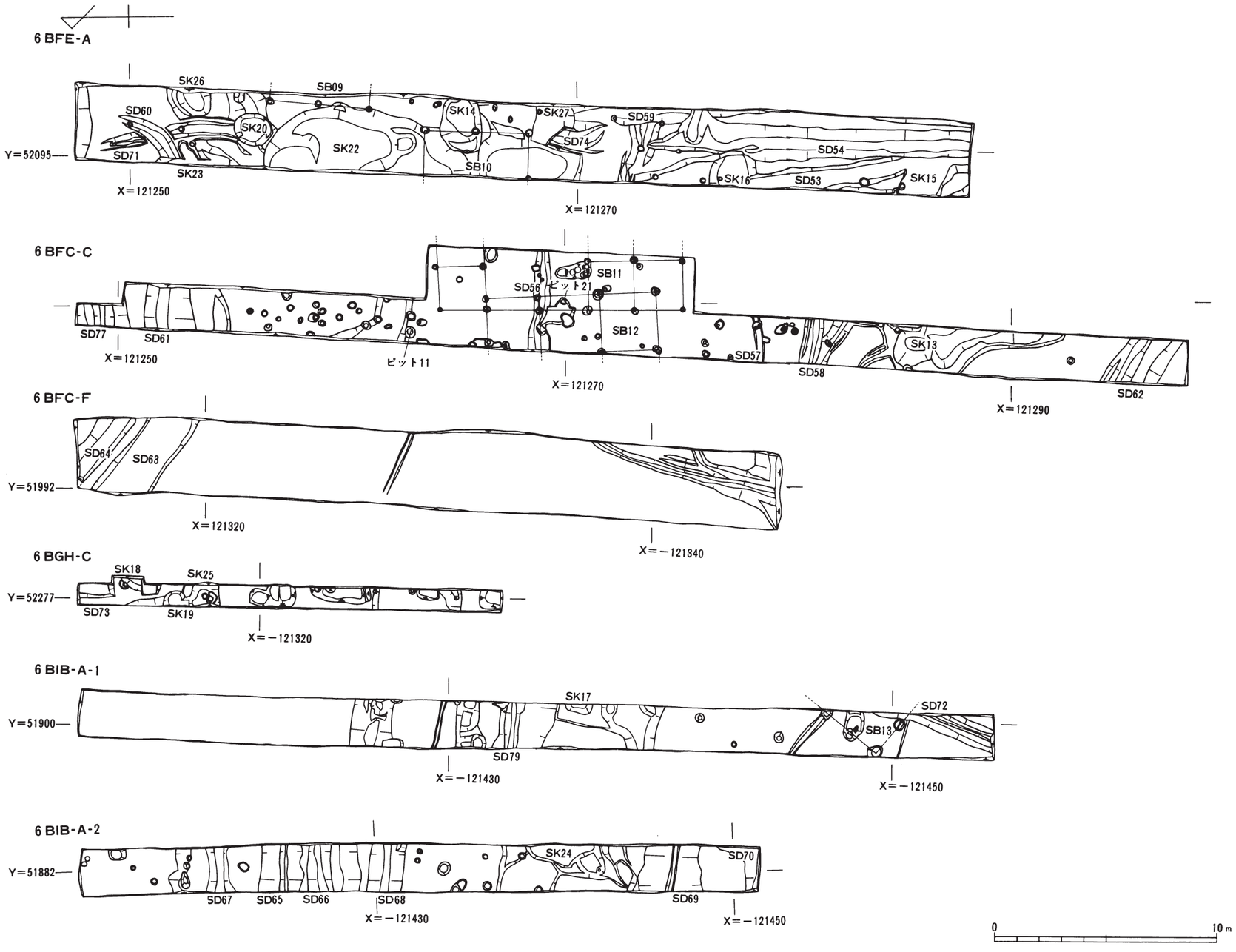
SD61　幅 2.3m、深さ 0.6m の東西溝である。奈良時代の瓦、山茶碗、青磁片が出土した。鎌倉時代の埋没が考えられる。

SD62　埋土の特徴からごく最近まで機能していた溝と考えられる。検出方向から耕地整理以前の地割りに伴うものであろう。



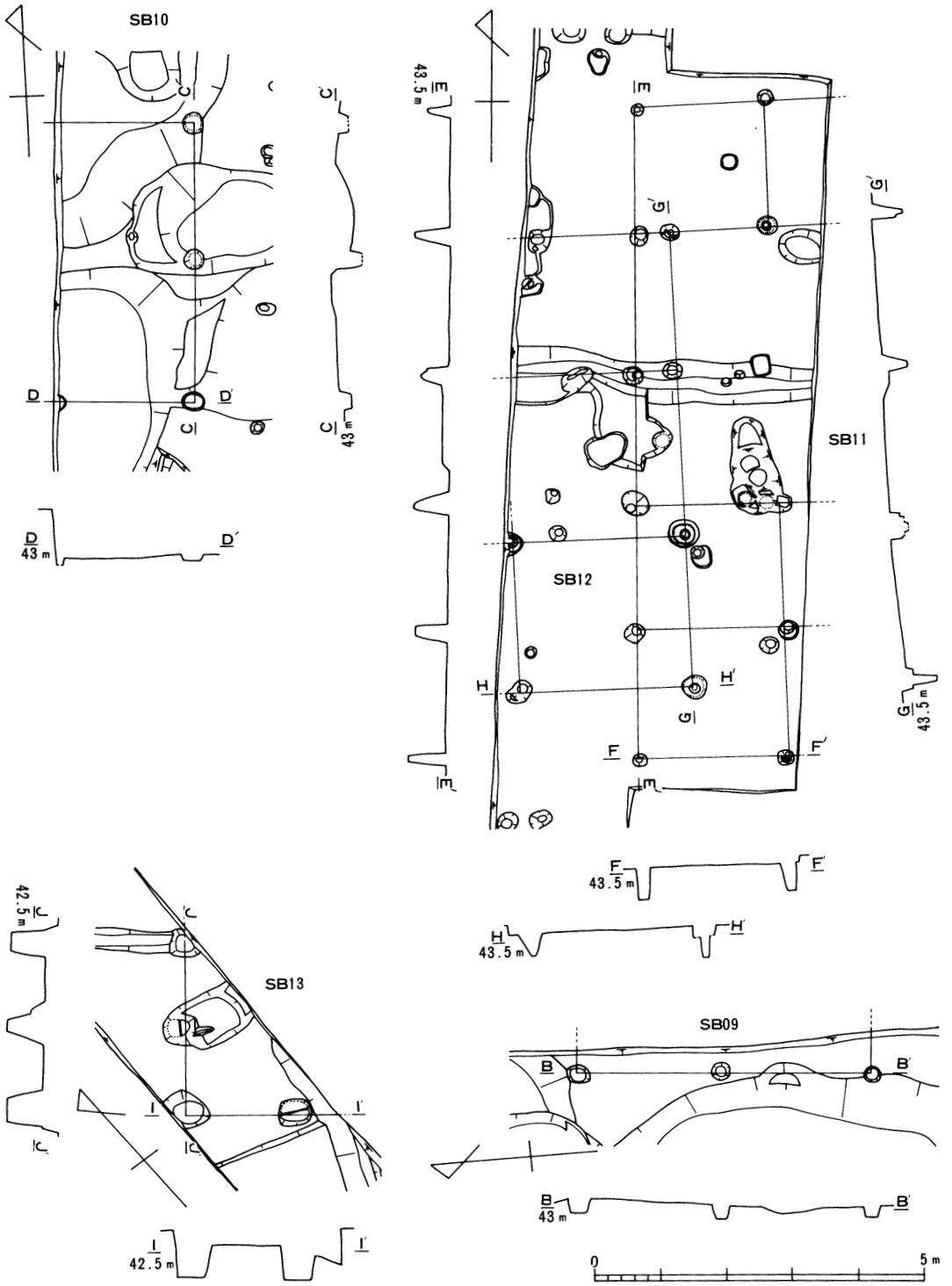
第２図　伊勢国分寺跡発掘区（縮尺 1/5 千）

（1.6BFE-A　2.6BFC-C　3.6BFC-F　4.6BGH-C　5.6BIB-A-1　6.6BIB-A-2）



第３図　伊勢国分寺跡調査区（縮尺１／200）

第４図　SK22（縮尺 1/40）



第 5 図　SB09 ～ 13（縮尺 1/100）

SD77　深さ 0.8m の東西溝で、2 条重複する。鎌倉時代の埋没が考えられる。

【６ＢＦＣ－Ｆ】

6BFC-C 調査区から緩やかに下がる微高地の縁辺部に位置するが、耕地整理のためかつての地表から 1m 内外の段差を生じたものと考えられる。

調査区の北半では大きく削平され、耕地整理以前の溝 (SD63・64) が検出され、南半においては鎌倉時代の溝 (SD80) の基底部をかろうじてとどめるのみであった。

【６ＢＧＨ－Ｃ】

常慶山国分寺と俗称「鐘撞堂」との間の畑地に調査区を設けた。奈良時代もしくは平安時代頃のものと考える柱穴が 2 基見つかったが、棟方向等は不明である。その他鎌倉時代の溝 (SD73)、土墳 (SK18・19・25)、柱穴が検出された。SK18・25 は柱穴より新しい。

【６ＢＩＢ－Ａ－１】

推定僧寺南辺から南へ 60m の地点に調査区を設けた。調査区のうち北から 10m の部分は大きく掘削されているため遺構は消滅している。平安時代の溝、鎌倉時代の溝、時期不明の掘立柱建物、土壙などが検出された。

SB14　掘立柱建物。N40°E。柱間は北西辺が約 1.4m、南西辺が約 1.6m である。出土遺物は全くなく、時期不明である。

SD72　幅 1.1m、深さ 0.6m。鎌倉時代の埋没が考えられる。

SD78　幅 1.8m、深さ 0.5m の東西溝。軒丸瓦 (29)、灰釉片などが出土した。平安時代の埋没が考えられる。

SD79　幅 1.6 ～ 2.2m、深さ 0.8m の東西溝。山茶碗 (69・70) などが出土した。13 世紀の埋没が考えられる。

SK17　深さ 0.3m の不整形土壙。南辺は溝状をなす。平安時代の埋没が考えられる。

【6ＢＩＢ－Ａ－２】

6BIB-A-1 から西へ 20m の地点である。鎌倉時代以降の溝、ピットなどが検出された。

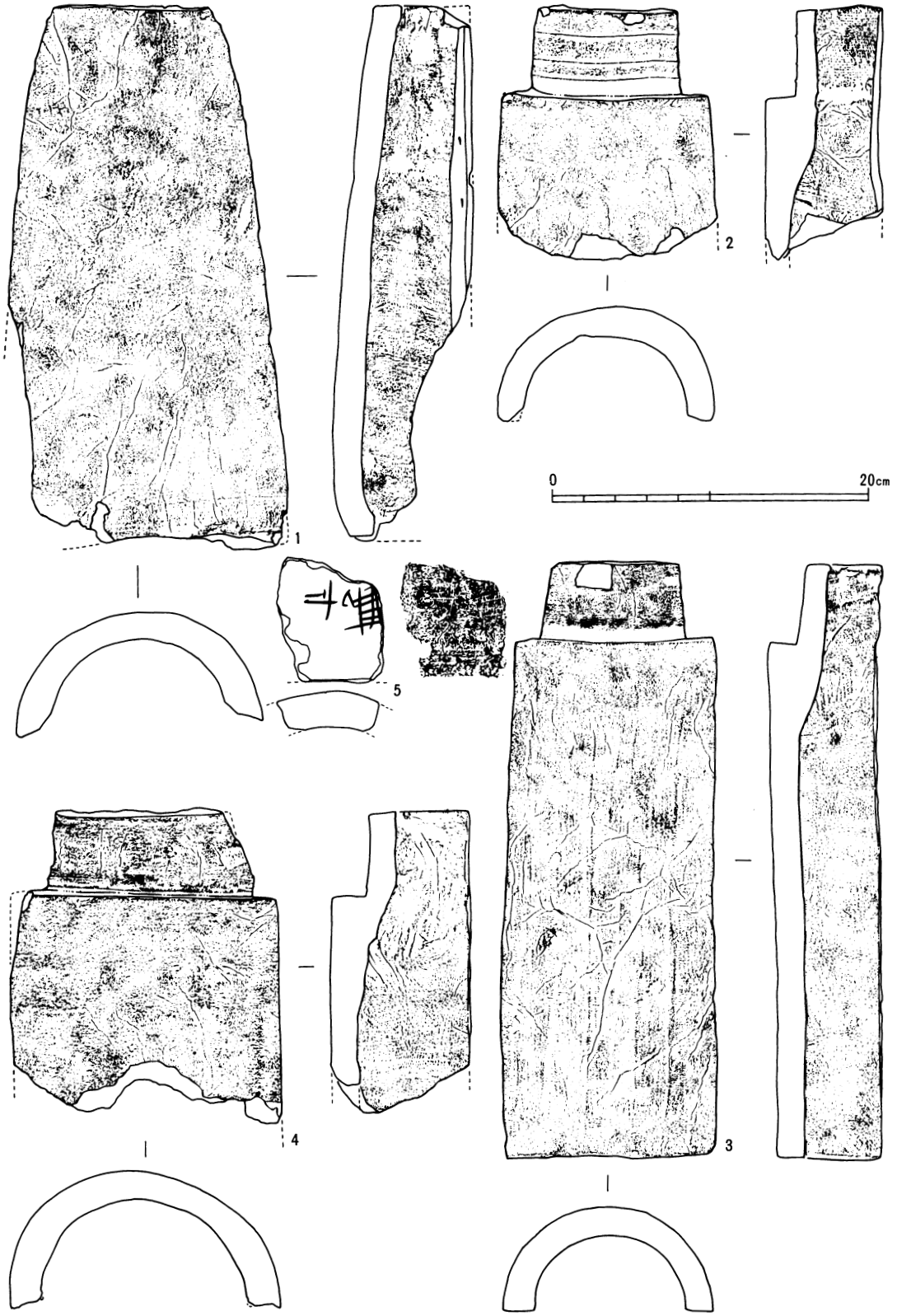
SD65・66・69・70　いずれも締まりのない埋土で耕地整理以前で、ごく最近の溝と考えられる。

SD67　幅 1.7m、深さ 0.4m の東西溝。平安時代以降の埋没が考えられ、SD78 に連続すると考えられる。

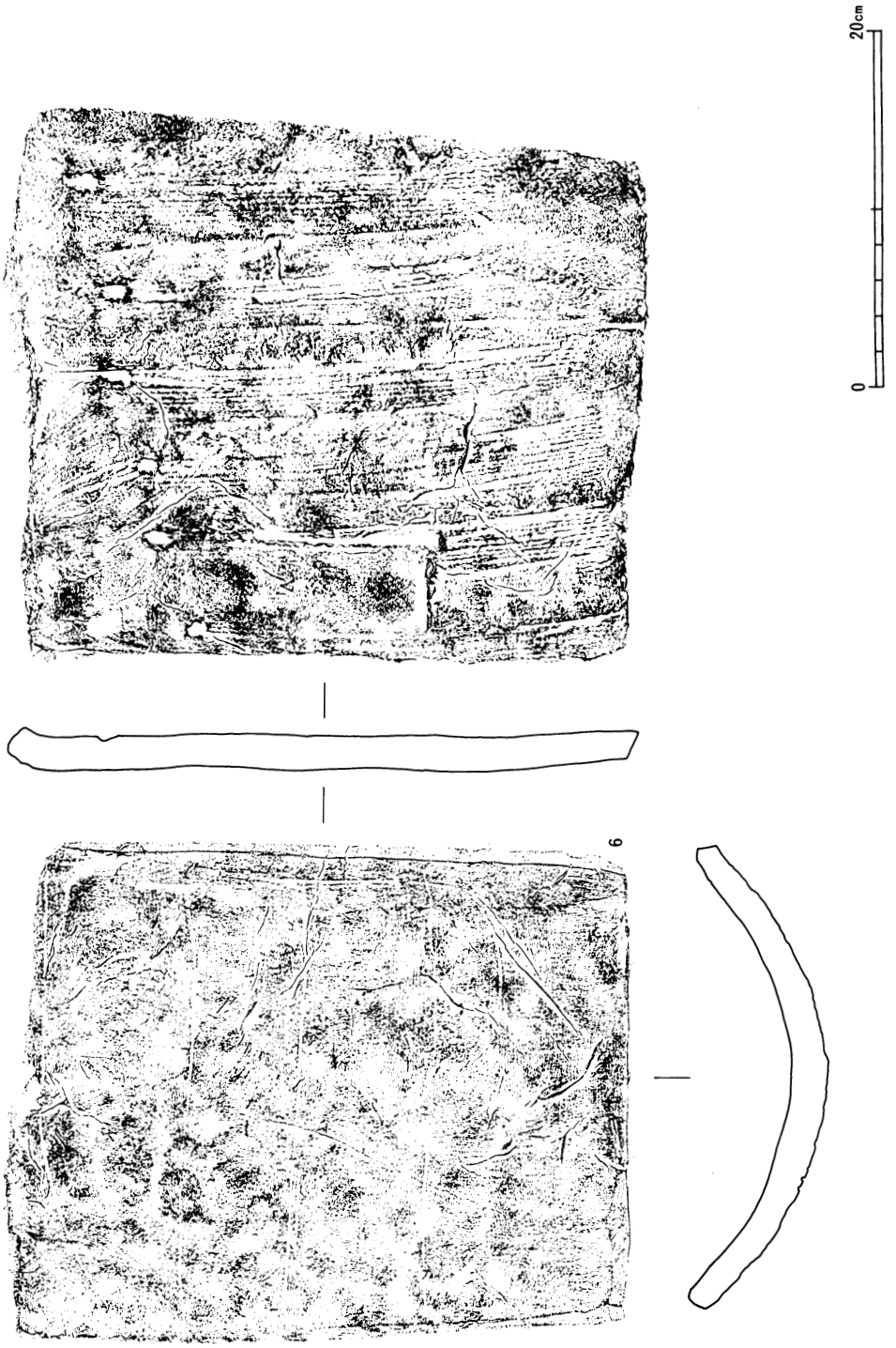
SD68　幅 1.5m、深さ 0.6m の東西溝。平安時代以降の埋没が考えられ、SK17 に連なる可能性がある。

2. 出土遺物

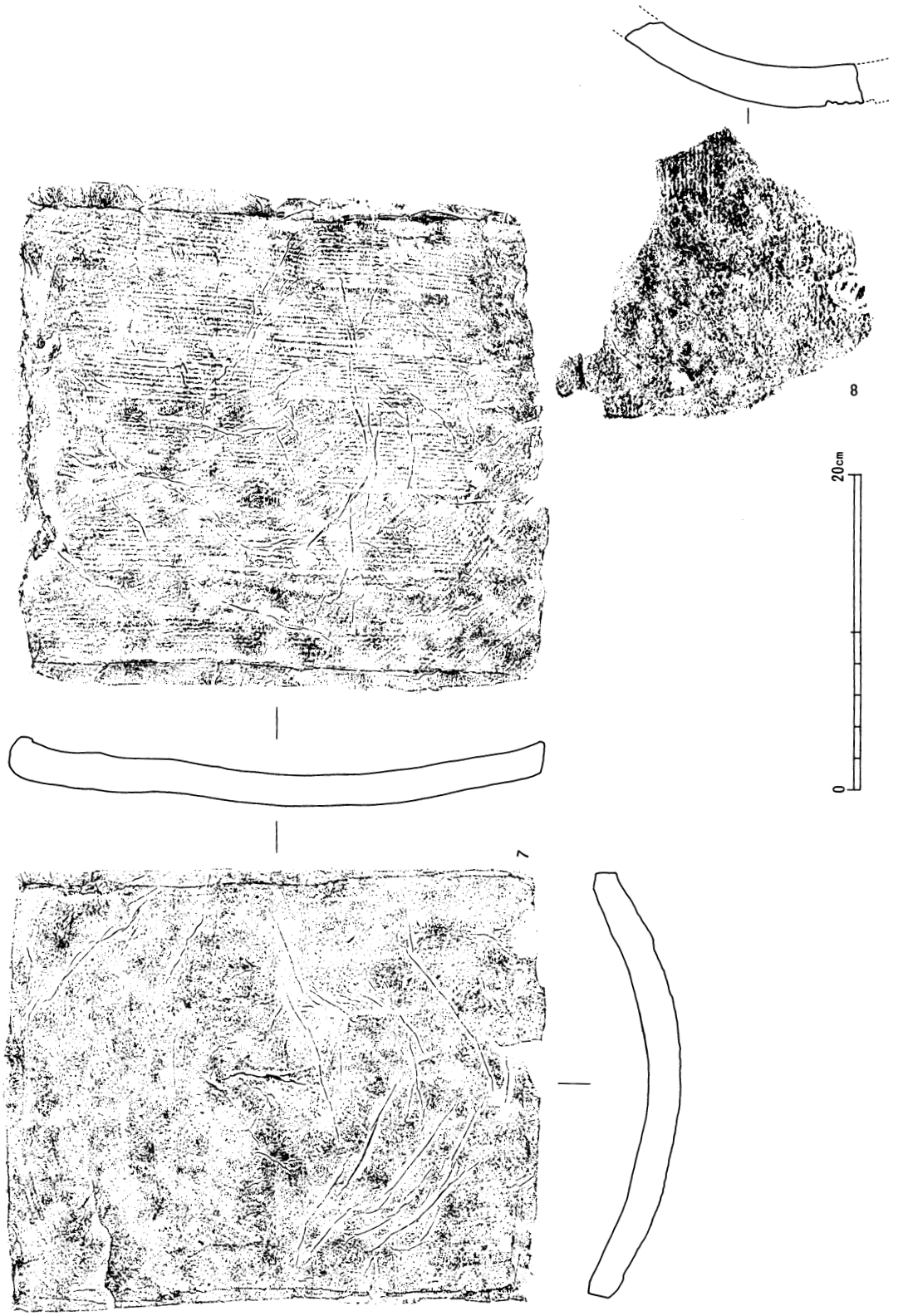
出土遺物の大半は奈良時代の瓦類で土嚢袋に約 400 袋出土した。それらの多くは 6BFE-A 地区の土壙出土のものである。その他、灰釉陶器・山茶碗・砥石などが出土した。



第６図　丸瓦（縮尺 1/4）（1・2－ＳＫ 22、3・5－ＳＫ 26、4－６ＢＦＥ－Ａ）



第７図　平瓦（縮尺 1/4）（ＳＫ 26）



第７図　平瓦（縮尺 1/4）（7－ＳＫ 26、8－ＳＫ 22）

ここで紹介するのは現在整理中のものから極力全種類を網羅するよう採取したものであり、したがって、これら以外に掲載すべき遺物が存在することも十分ありうるものである。

なお、伊勢国分寺跡の軒瓦についてはすでに型式分類が試みられているが (浅尾 1991)、必ずしも完形資料に基づいてなされているわけではない。少なくとも型式の細分・細々分に至っては軒平瓦Ⅳ Bb 型式とⅣ Bc 型式にみられるように弁別が困難なものもあり、将来はより良好な資料をもとにした再整理も必要となろう。現段階においては混乱を避けるため浅尾分類に準拠し、新出資料についてはあえて型式名を与えなかった。

丸瓦 (第 6 図 1 ～ 5) 以下の 3 類に大別できる。

1 類 (1)　行基葺式。側縁は縦に 2 面削られる。凸面は主に縦に調整されるが、横方向の調整も見られる。

2 類 (2 ～ 3)　玉縁式で、幅の狭いもの。ともに胴部凸面は縦に調整される。2 の玉縁には水切り突帯が 3 条ある。

3 類 (4)　玉縁式で、幅の広いもの。胴部及び玉縁凸面は回転調整される。

その他 (5)　5 は端部凸面にヘラ描きのある細片である。

平瓦 (第 7 図 6、第 8 図 7・8)　1 種類のみ掲載できた。

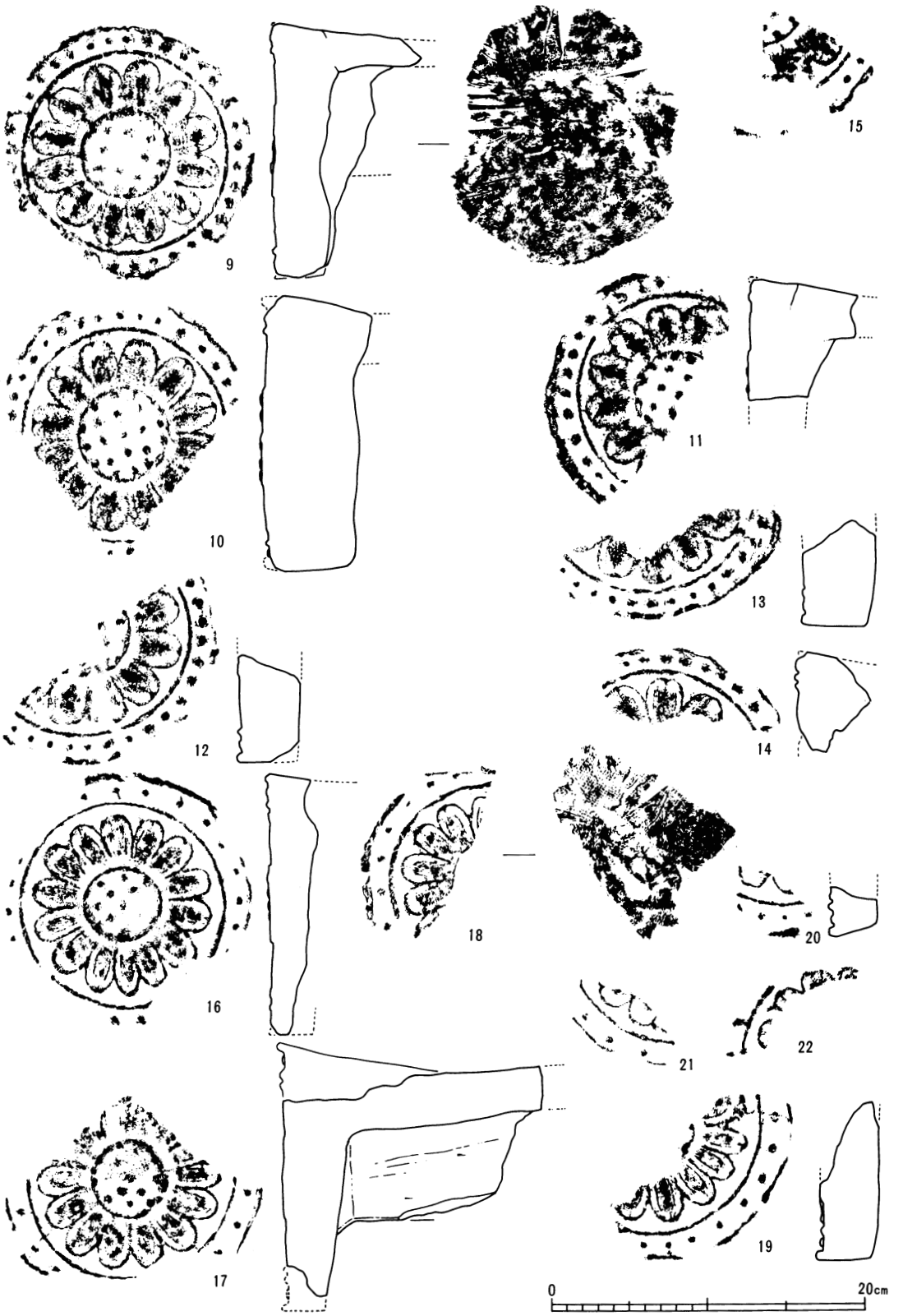
1 類 (6 ～ 7) 小振りので広端幅と狭端幅の差が少なく、平面形が矩形に近い。凹面は一部布目痕を残し横に調整され、凸面には叩き痕が残る。6 の凸面には縄の結び目が残る。8 は凸面に「三」の刻印のある破片である。

第 1 表　伊勢国分寺跡丸瓦計測表

固体番号	全長	最大幅	最大高	広端厚	玉縁幅・狭端	玉縁高・狭端	玉縁長	狭端厚	色調	硬度
1	350	—	91	20	99	63	—	18	5Y8/2	並
2	—	140	75	—	95	56	55	13	N5/0	やや硬
3	384	139	75	17	93	50	52	15	5PB5/1	硬
4	—	173	90	—	134	66	55	17	N3/0	並

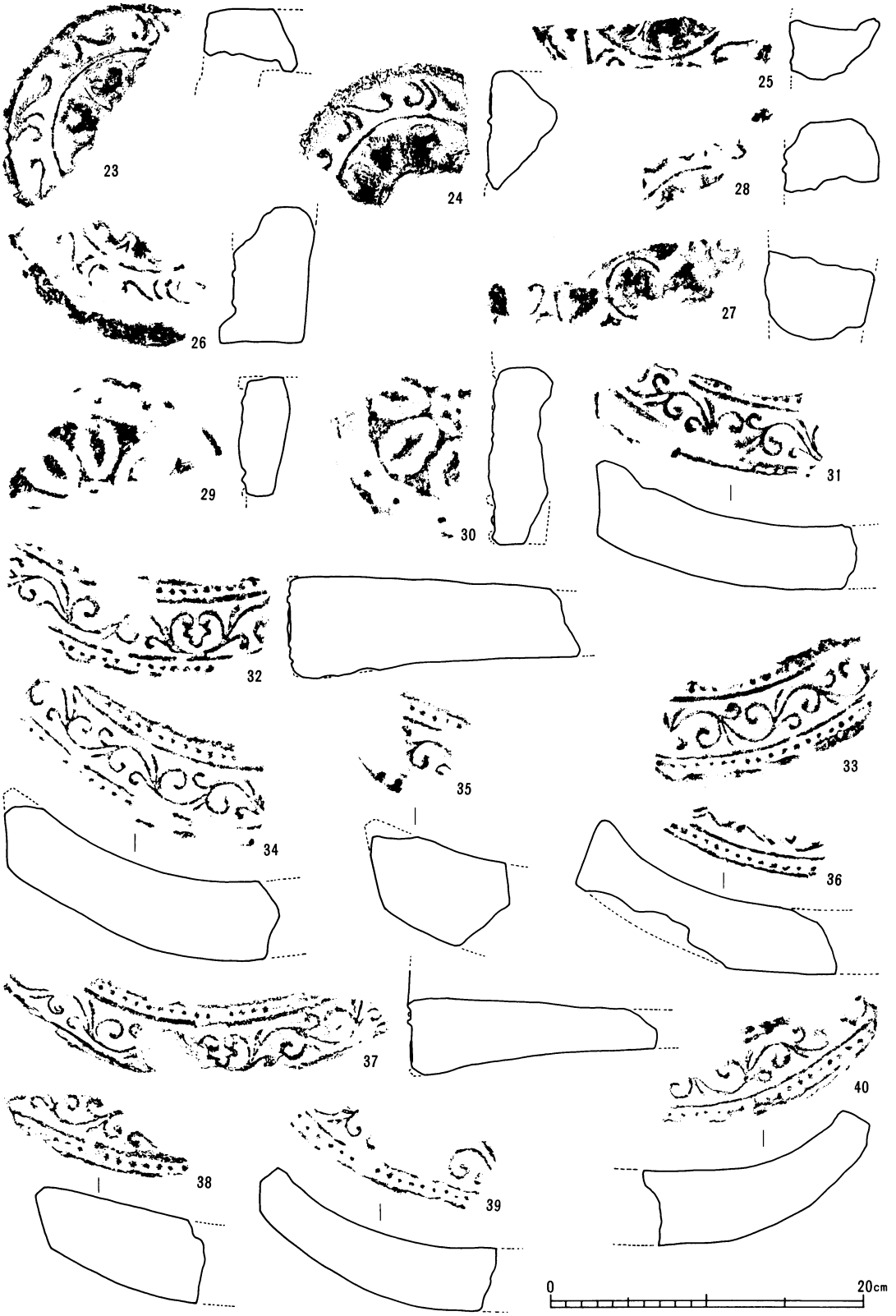
第 2 表　伊勢国分寺跡平瓦計測表

固体番号	全長	最大幅	広端幅	広端厚	狭縁厚	最大高	色調	硬度
1	352	268	18	233	16	77	N6/0	やや軟
2	338	277	25	265	13	57	5PB5/1	硬



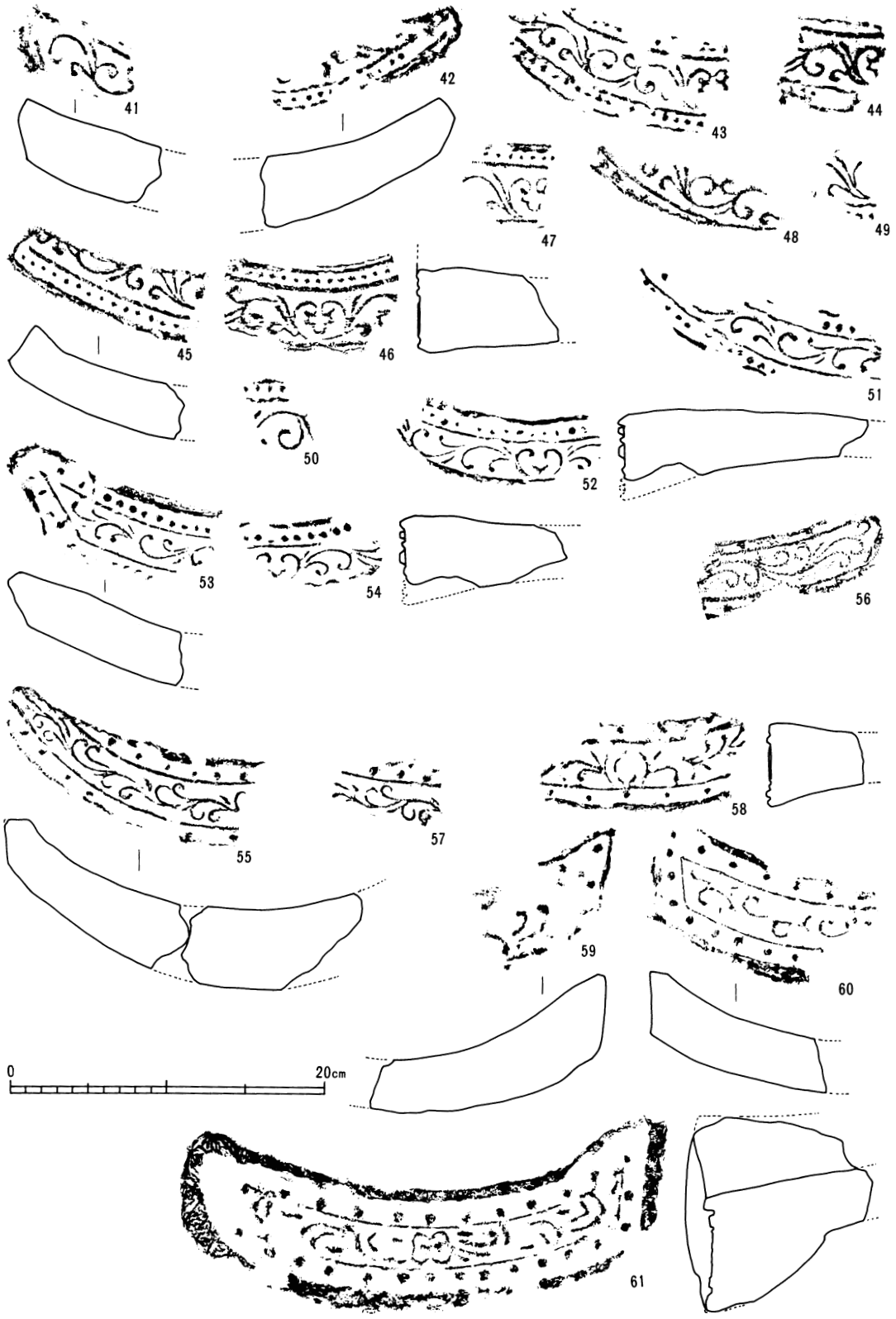
第９図　軒丸瓦（縮尺 1/4）

（9 ― SK26、10・17 ― SK20、11・13・16・19 ～ 22 ― SK22、12・14 ― SK21、15 ― SD74、18 ― 6BFE-A）



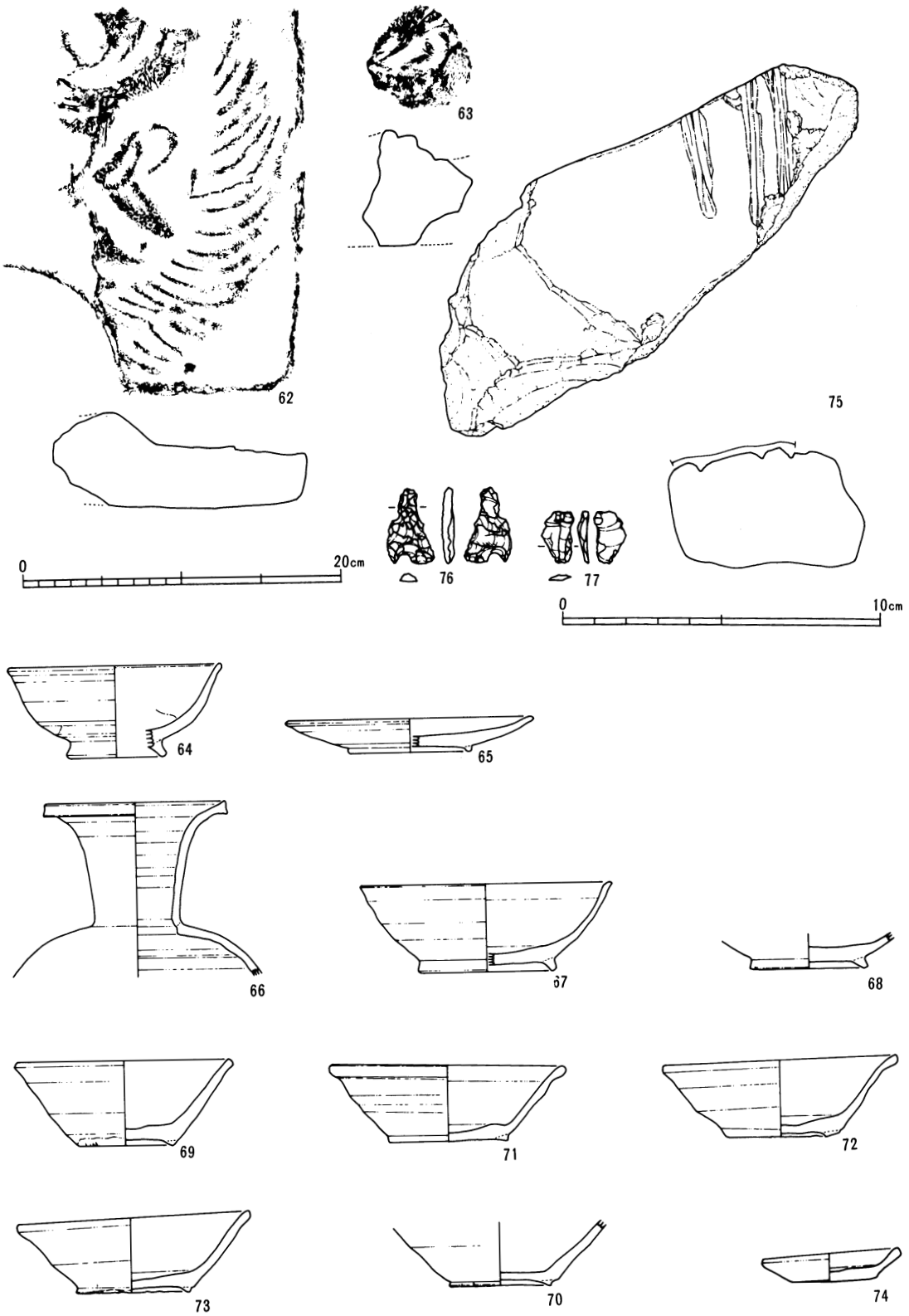
第 10 図　軒丸瓦･軒平瓦（縮尺 1/4）

（23・36 ― SK20、24・40 ― SK26、26 ～ 28・30 ～ 33・35・37 ～ 39 ― SK22、34 ― SK14、25 ― 6BFE-A、29 ― SD78）



第 11 図　軒平瓦（縮尺 1/4）

（41・42・44・52 ― SK26、43・45 ～ 51・53 ～ 55・57・60 ～ 61 ― SK22、58 ― SD71、56 ― 6BFE-A、59 ― SD79）



第 12 図　鬼瓦・土器（縮尺 1/4）**・石器**（縮尺 1/2）

（62・66 ～ 68 ― SK22、63 ― SD65、75 ― SD54、64・74 ― 6BFE-A、65 ― Pit21、71 ～ 73 ― Pit11、69・70 ― SD79、76-77 ―表採）

軒丸瓦（第 9 図 9 ～ 22、第 10 図 23 ～ 30）　5 種類出土した。9 ～ 15 はⅤB、16 ～ 22 はⅥ、23 ～ 25 はⅦ靱、29 ～ 30 はⅢE 型式である。26 ～ 28 はⅦ型式に深さ 10mm の傾斜縁を付加したこれまで未見のものである。

9 は瓦当裏面に布目痕を残すが、丸瓦部凹面の布目痕には連続せず種類も異なる。

Ⅵ型式は笵傷により川原井瓦窯跡出土資料との同笵関係が確実な資料である。18 は瓦当裏面から丸瓦部へ続く布目痕から一本造りによるものと思われる。

軒平瓦（第 10 図 31 ～ 40、第 11 図 41 ～ 61）　6 種類出土した。31 ～ 50 はⅣC、51 ～ 54 はⅣBb・c、58 ～ 59 はⅣBa、60 はⅣD、61 はⅦ型式である。55 ～ 57 はⅤA 型式そのものか、それに類似するものと思われ、55 は明らかに型式認定資料と異なる。すなわち、浅尾 1991 に示されたⅤA 型式の唐草紋様が第 4 単位までであるのに対し、本資料は川原井瓦窯跡出土例と同様 5 単位みられる（田中 1979）。

ⅣBb・c 型式は 52・54 にみられるように中心飾りがⅤA 型式のものに近いことが明かとなった。ⅣC 型式には上外区や脇区などを欠いた著しい籠ずれのあるものがあり、これらは笵と瓦当面の形状が一致せず、平瓦部側縁の面取りも狭い。33・46・48 の凸面には赤色顔料が付着している。

鬼瓦（第 12 図 62・63）　62 は彫りが浅く板状を呈し低い外縁は傾斜縁となっている。巻きの弱い髭が低い突線で表現され、牙の先端は外方へ開く。63 は眼の下の部分と考えられる。

灰釉碗（第 12 図 64）　口径 136mm、底径 63mm、高さ 59mm。丸い体部にやや細長い高台がハの字状に付き、灰釉が漬け掛けされる。丸石二号窯式と考えられる。

灰釉皿（第 12 図 65）　口径 158mm、底径 78mm、高さ 22mm。厚い低部に低い高台を有し、口縁端部は軽く外反する。灰釉は内面のみ刷毛塗りされる。黒笹 14 号窯式と考えられる。

灰釉長頸瓶（第 12 図 66）　口径 117mm。外面全面に施粕される。折戸 53 号窯式と考えられる。

山茶碗（第 12 図 67 ～ 73）　67 は口径 160mm、底径 88mm、高さ 56mm、68 は底径 74mm、69 は口径 138mm、底径 61mm、高さ 54mm、70 は口径 150mm、底径 76mm、高さ 50mm、71 は口径 15mm、底径 71mm、高さ 52mm、72 は口径 148mm、底径 71mm、高さ 51mm、73 は底径 64mm。67 ～ 68 は SD79 出土で、丸みを帯びた体部を有し、しっかりした高台を持つ。68 は内面が硯に転用されており赤色顔料が付着している。底部外面に墨書を有するが判読できない。69 ～ 73 は低い潰れた高台を有する。71 ～ 73 はピット 11 の一括出土である。

山皿（第 12 図 74）　口径 88mm、底径 54mm、高さ 21mm。無高台で、口縁端部は肥厚する。

砥石（第 12 図 75）　長さ 117mm、幅 134mm、厚さ 38mm。肌理の粗い砂岩製の筋砥石で断面 V 字形の溝が 3 条ある。SD54 出土。

石鏃（第 12 図 76）　長さ 23.7mm、幅 14.7mm、厚さ 3.6mm。国分町字堂跡付近での採集資料。チャート製。逆刺部が非対称。

剥片（第 12 図 77）　長さ 16.3mm、幅 9.6mm、厚さ 3.3mm。国分町字堂跡付近での採集資料。チャート製の剥片で背面には腹面と同一方向の剥離面を有する。

Ⅲ．長者屋敷遺跡の調査

1. 検出遺構

藤岡謙二郎氏が「B 地点 (南端建物趾)」とした部分の性格及び範囲を明らかにする目的で調査に着手した。「B 地点」は第 1 次調査で礎石建物が検出された南野 1 地区 (藤岡氏の「A 地点」) から南西へ約 300m、「B 地点」同様軒瓦が分布する「C 地点」から南へ約 250m の地点に位置する。B 地点の現況は東半がスギ・ヒノキからなる山林及び竹林で、西半が荒蕪地である。調査区は山林内に 3 箇所 (6AJA-A-1・2・3)、山林の西に 1 箇所 (6AHI-F)、東に 2 箇所 (6AJA-D、6AJD-A) 設定した。基本層序は第 1 層がクロボクから成る耕作土 0.2m 前後で以下黄褐色の地山層であるが、山林内では表土下にプライマリーなクロボク層が 0.4m 前後認められる。

調査の結果、6AJA-A-1・2 地区で確認した建物 SBO3 並びに SCO1 は、後述の調査所見と未調査部分をも含めた配置形態及び規模から伊勢国府政庁の後殿と軒廊に比定された。

【6ＡＨＩ―Ｆ】

荒蕪地から用水路を挟んで西に位置する畑に「B 地点」の西限を探る目的で調査区を設けた。表面的には瓦や土器類の分布は認められない地点で (村山 1993)、地権者によれば畑の東半分はクロボクが深いとのことであった。耕作土を約 0.2m 除去した黄褐色地山上面で遺構検出を行った。その結果、溝状の落ち込み SDO4 と土壙 SKO1 が検出された。

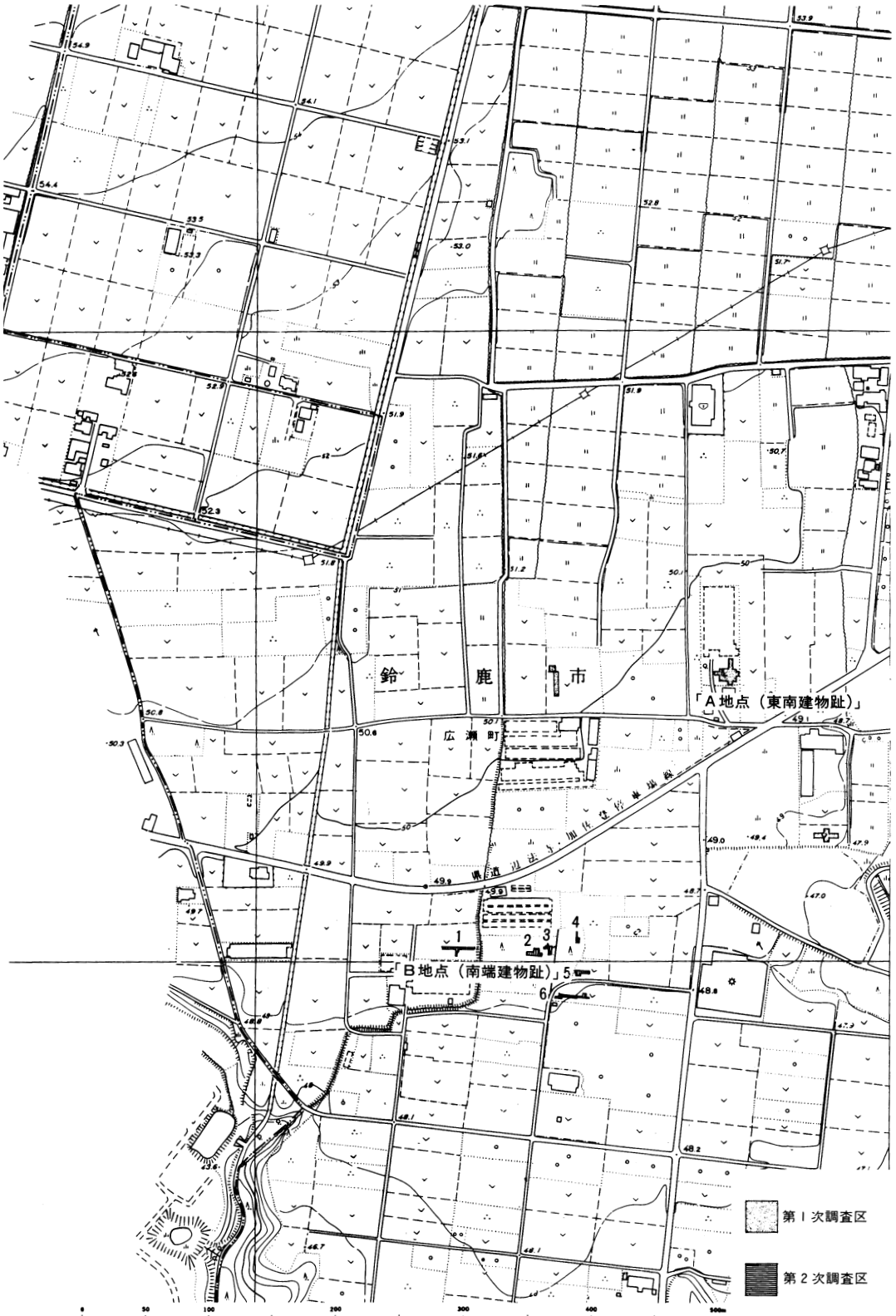
SDO4　深さ 0.5 ～ 1.1m の南北溝で、東西 14.8m にわたって検出された。西辺は南にいくに従い深さを減じている。東端は現在の用水路のすぐ近くまでトレンチを延ばしたが、溝の立ち上がりは検出されなかったため、さらに東に続くものと考えられる。地表から約 0.3 ～ 0.4m までは耕作土及び撹乱層で、西の立ち上がりはわずかに破壊されている。埋土中程には水成層と考えられる水平堆積が観察できる。出土遺物は乏しく、瓦片が少量出土したのみである。

SKOI　SDO4 内で検出された。掘り込みは SDO4 の基底部から行われており、SDO4 の埋土が流れ込んでいる。拳大の礫と瓦片が出土した。

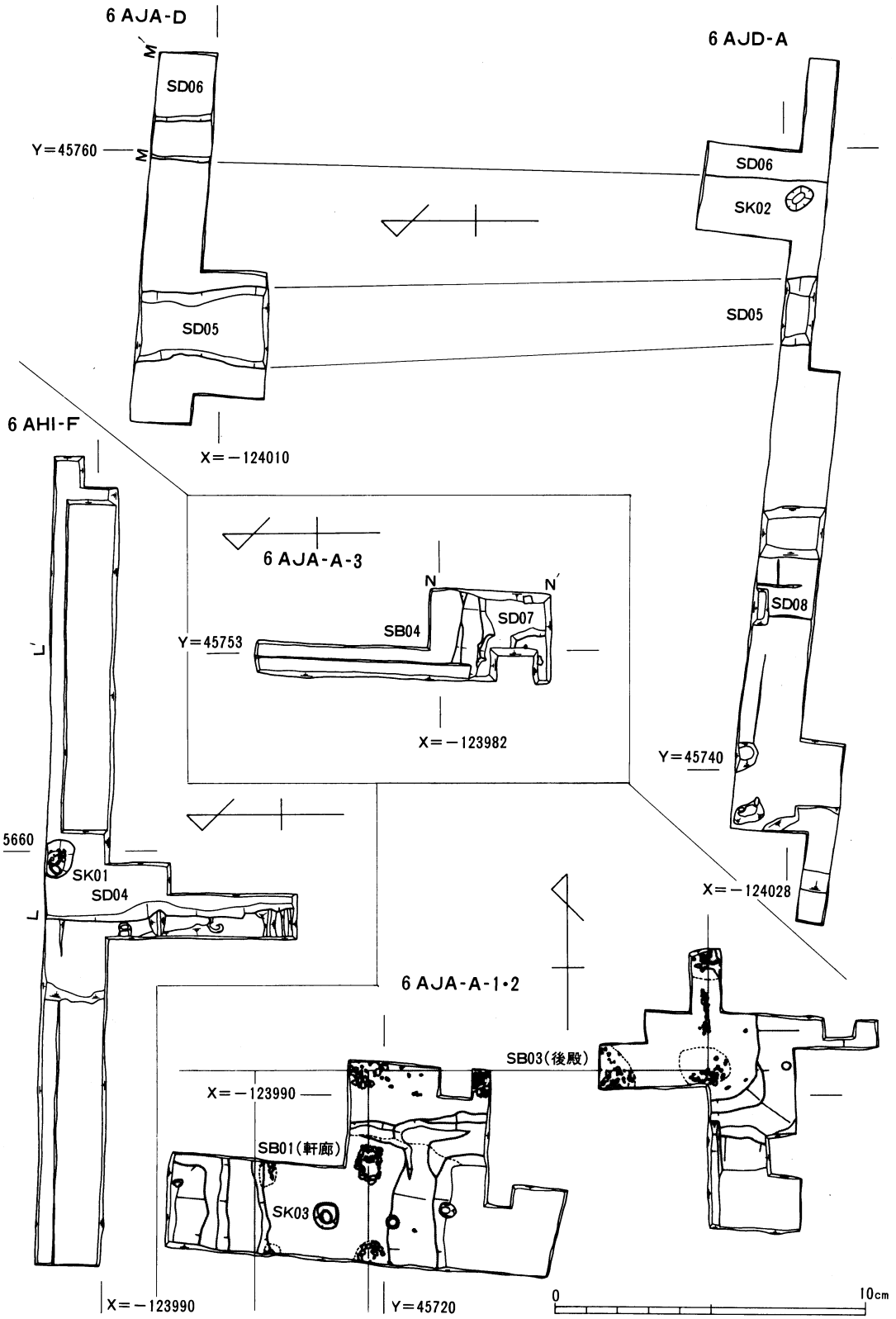
【6ＡＪＡ―Ａ―１・２】

6AHI-F から西へ 40m の山林内に調査区を設定した。約 0.8m の高まりをなす廊状の部分と、その北に接する高さ約 1m の高まりにトレンチを設けた。樹木の腐植土からなる表土を約 0.1 ～ 0.4m 除去し、遺構の確認を行った。その結果、旧表土であるクロボクをベースに版築工法によって造営された建物基壇であることがわかった。基壇の一部にサブトレンチを設け、断面の観察を行った。

SBO3(後殿)　礎石瓦葺建物で、棟方向は座標北に一致する。建物南辺の東半 3 間分と東辺の南から 1 間分を検出し、柱間は全て 3.6m(12 尺) で計測可能である。したがって、SCO1 と連結する部分を中央間として西へ折り返せば桁行 7 間等間であると推定できる。



第13図　長者屋敷遺跡発掘区（縮尺1／5千）
（1．6AHI-F、2．6AJA-A-1、3．6AJA-A-2、4．6AJA-A-3、5．6AJA-D、6．6AJA-A）



第 14 図　長者屋敷遺跡調査区（縮尺 1 /200）

礎石掘形は 1.0 ～ 1.6m で、表土が浅いため撹乱されている部分も多い。根石には付近の段丘堆積層から容易に入手可能なチャート・砂岩など径 0.1 ～ 0.2m の亜円礫が用いられている。礎石そのものは全く残っておらず、未調査部分においても見いだされていない。東辺で検出された 2 箇所の礎石掘形の間には地覆の一部が残存していた。検出された地覆は 4 分の 1 程度に切断した平瓦 (2 類) を、側縁を揃えて 1 列に並べたものである。基壇は黒色土、暗褐色土、黄褐色土などが 0.02 ～ 0.1m ずつ交互に積み重ねられ、基盤のクロボク土上面から基壇上面までの高さは約 0.9m に達している。さらにクロボク土以下に 0.6m 掘込地業が認められる。基壇の盛土はある程度流出しており、とくに基壇回りは角がとれ丸みを帯びているため損傷が著しいと考えられる。基壇化粧はその部材はおろか抜き取り痕跡等も検出されなかった。南東角の礎石掘形から約 2.5m 南には足場穴と考えられる小土壙が検出された。足場穴の掘形は径 0.5m、深さ 0.5m で、抜取痕も観察された。遺物は SCO1 との連接地点に集中し、SBO3 基壇南東角の南は SCO1 の東西に比して遺物の出土量が少なかった。

SCO1(軒廊)　礎石瓦葺で、礎石の根石が 4 箇所確認された。柱間は南北が 3m(10 尺)、東西が 3.6m(12 尺) で計測でき、東西 1 間・南北 5 間の建物が復元できる。東辺は西辺に比して比較的残りがよいが、検出された根石は基底部で、掘形はほとんど失われている。礎石掘形の径は残存部で 0.9 ～ 1.3m で、SBO1 より若干規模を減ずる。基壇の高さはクロボク土上面から 0。8m を測り、SBO3 の基壇同様土砂の流出が著しく、特に西側は残りが悪い。SBO3 と接する箇所は浅い溝状を呈し、土層の違いにより基壇の境目が明瞭に観察できる (第 14 図)。遺物の大半は軒瓦を含む瓦類で、その他土師器・須恵器が少量出土している。遺物は基壇東西の全面から出土し、焼土や炭化物も遺物に混じって検出された。

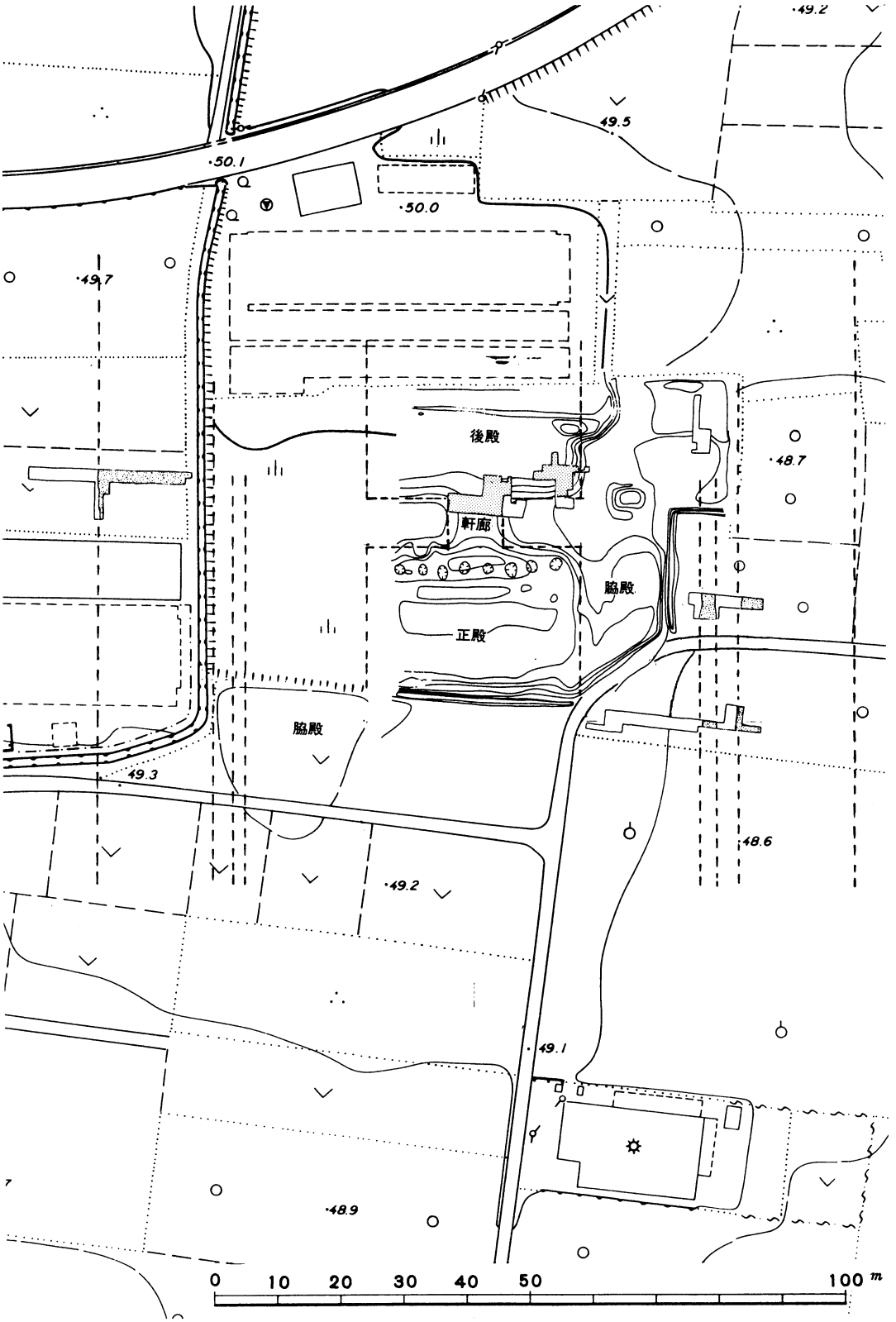
平瓦は後述の 2 類が多く、軒平瓦は 1 類がやや目立ち、平城宮 6719-A 型式と同型式と考えられる 3 類は 1 点のみ SCO1 の東側で出土した。なお、SCO1 の中央部分からは時代の降る焼土壙が検出されたが、時期は不明である。

【6ＡＪＡ―Ａ―３】

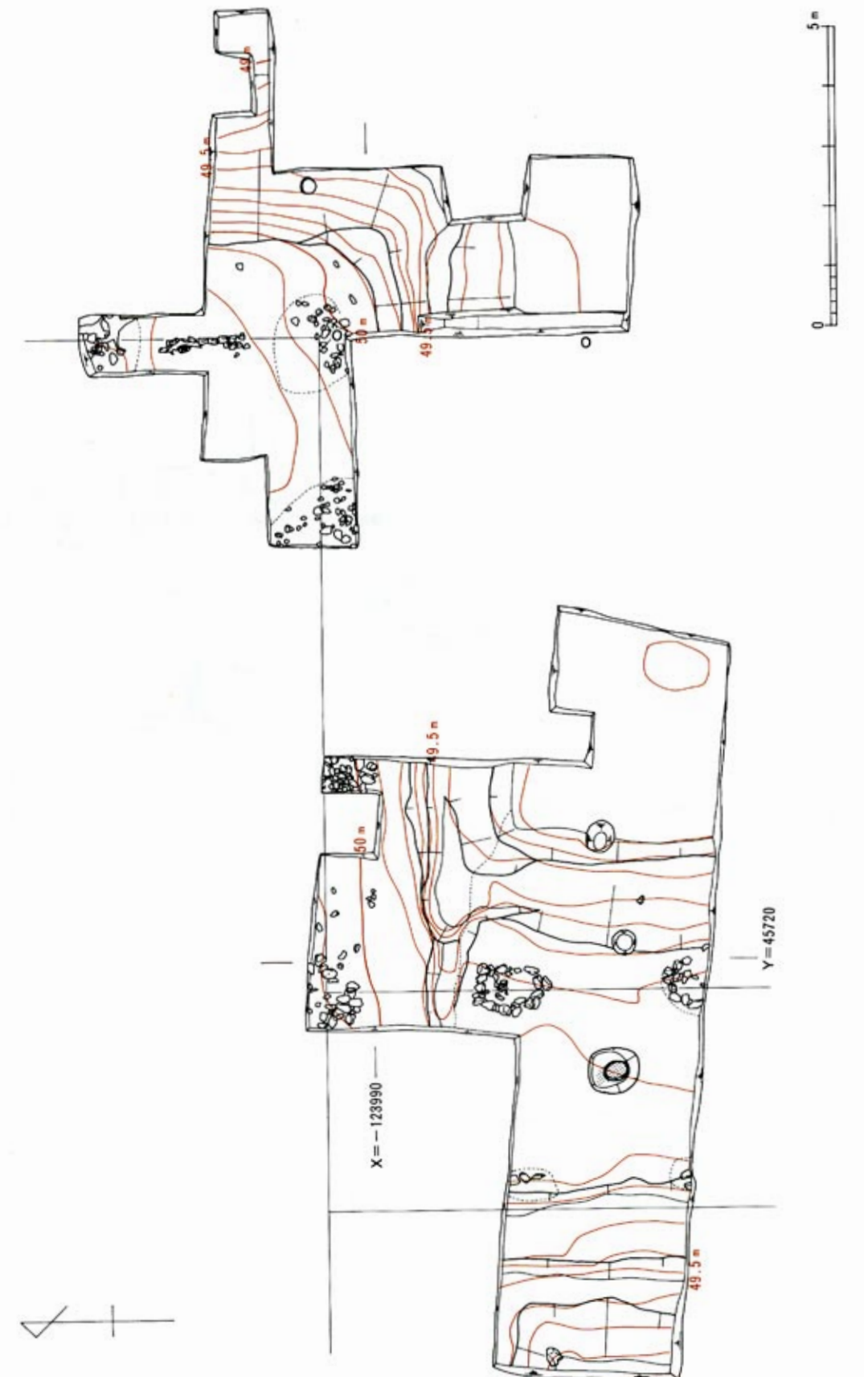
6AJA-A-1・2 区同様山林内で、6AJA-A-1 から北東東へ約 18m の地点に位置する比高 0.6m の高まりにトレソチを設げた。この基壇状の高まりと同様なものが SBO3(後殿) を挟んで西側にもシンメトリックな位置に認められることが知られる (藤岡 1960)。腐植土からなる表土を 0.3m 除去し遺構の確認を試みた。

SBO4　礎石の痕跡等は全く検出されなかったが、何らかの建物基壇であると想定した。表土下にはよく締まったクロボク層が安定して認められ、その上面からは平瓦が数点張り付くようにして出土した。調査区西辺は表土下のクロボクを 0.3 ～ 0.4m 掘削し黄褐色土地山上面までサブトレソチを設けたがクロボク層の分層はできず、明瞭に版築工法の認められた SBO3 や SCO1 とは様子が大きく異なる。

SDO7　SBO4 に接する溝である。調査地点では東西溝と判断できる。深さは SBO4 基壇上面から 1.0 ～ 1.2m を測り、南北の幅は南の立ち上がりが検出できなかったため不明で



第 15 図　伊勢国府政庁建物配置図（縮尺 1 / 千）



第 16 図ＳＢ 03・ＳＣ 01（後殿及び軒廊）（縮尺 1/100）

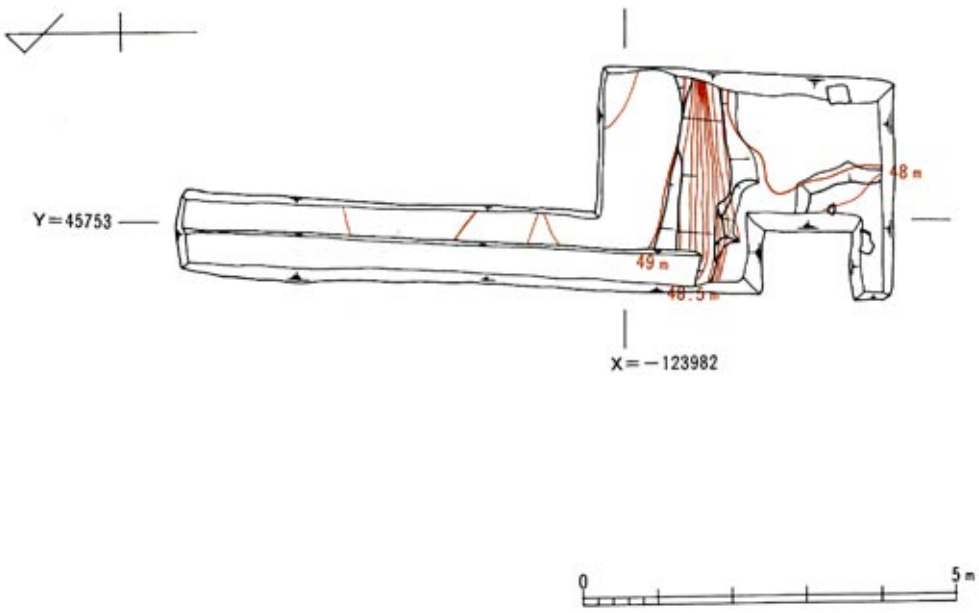
ある。溝内からは丸瓦・平瓦が大量に出土したが、軒瓦は全く含まれていなかった。この溝はSDO5の延長線上に位置するため、本地点にて90°屈曲したものであると考えられる。

【6ＡＪＡ-Ｄ】

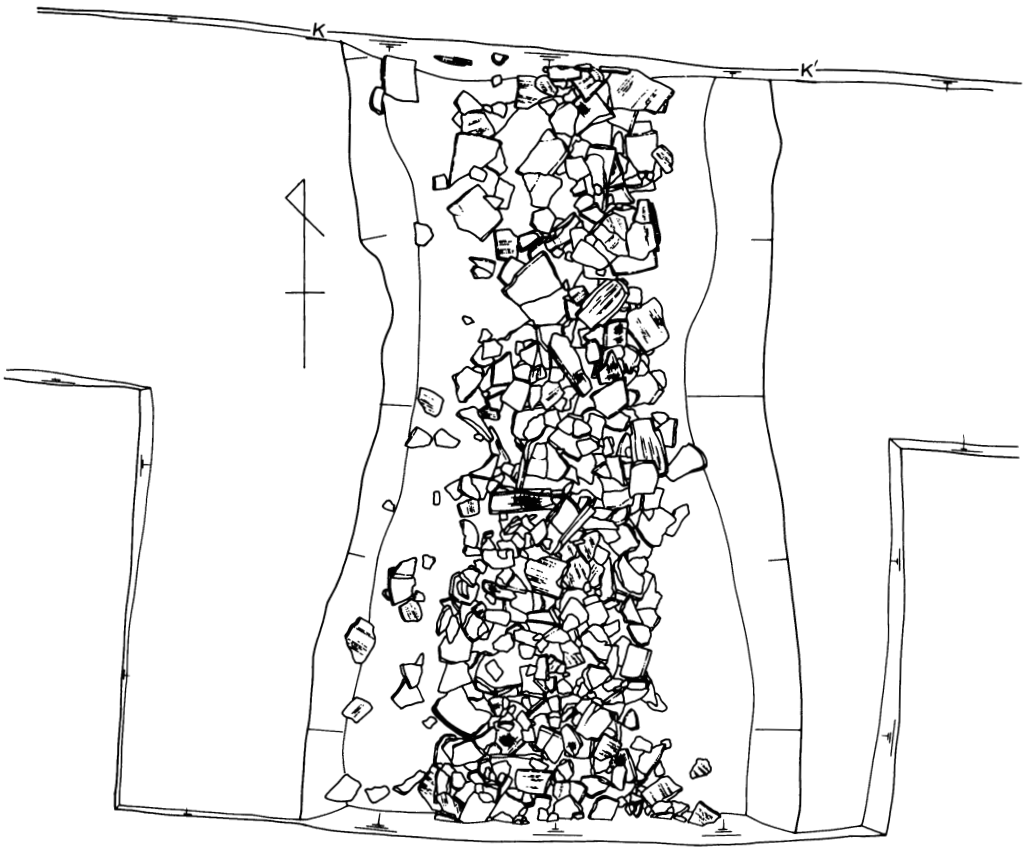
Ｂ地点の東限を確認する目的で山林の東に調査区を設定した。現況は畑地で山林とは約0.5mの比高差がある。瓦の分布が濃厚な地点とされる(村山1992)。耕作のため山砂等が他所から持ち込まれている。遺構検出は表土である耕作土を0.2～0.3m除去した黄褐色土上面で行った。その結果、溝が２条(SDO5・SDO6)検出された。

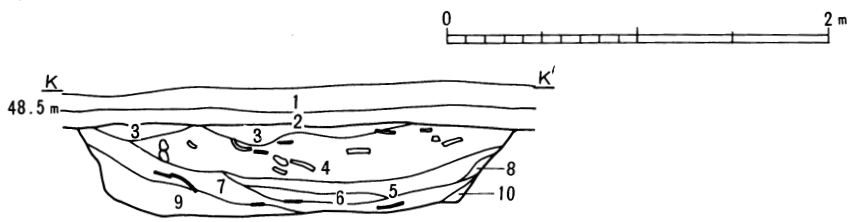
SDO5　幅2.0～2.6m、深さ0.4～0.5mの南北溝で当調査区内では座標方位にほぼ一致する。深さはほぼ一定であるが、幅には変移があり、一部くびれた平面形をなす。出土遺物の大半は瓦類で土師器・須恵器・灰釉陶器が少量出土した。層位的には遺構上面から中程までに分布が集中し、基底部付近からも若干出土している。遺物とともに焼土や炭化物も一定量認められ、西側から流れ込んでいる様子が窺える。東からは黄褐色土が流れ込んでいる。

SDO6　深さ0.4mの南北溝で、SDO5から東へ4.2m離れて並行する。西辺の立ち上がりは検出されたものの、東西は3.3m確認したのみで、東の肩は不明である。埋土は上から約３分の２が深耕により掩乱を被っている。丸瓦・平瓦が出土したが、SDO5に比べて非常に少ない。



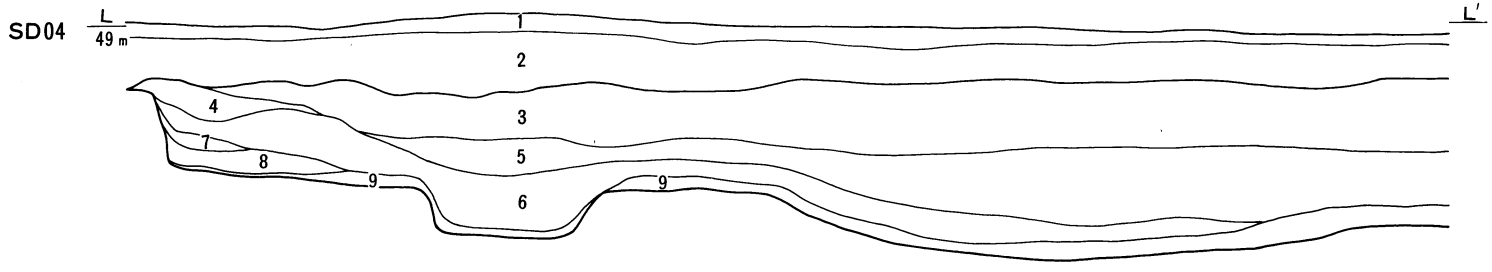
第17図ＳＢ04・ＳＤ07（北東建物）（縮尺1/100）





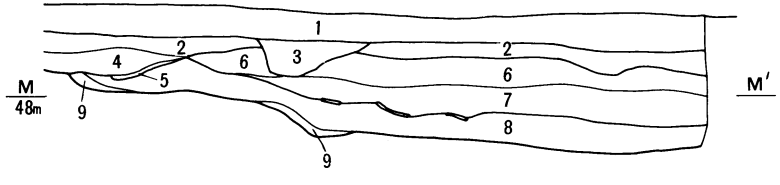
1．黒褐色砂礫混．10YR3/1．耕作土
2．黒褐色砂質．10YR3/1．耕作土
3．黒色．2.5Y2/1
4．黒褐色砂礫混．10YR3/1．炭・焼土粒子含む
5．黒褐色砂質．10YR3/1．黄褐色粒子含む
6．黒色砂質．10YR2/1．黄褐色・褐色ブロックと炭・焼土含む
7．黒褐色砂質．10YR2/2．炭・焼土多く含む
8．にぶい黄褐色粘質．10YR5/4
9．黒色．2.5Y2/1．黄褐色ブロック少量含む
10．にぶい黄褐色粘質．10YR5/4

第18図ＳＢ05遺物出土状況・土層断面（縮尺 1/40）



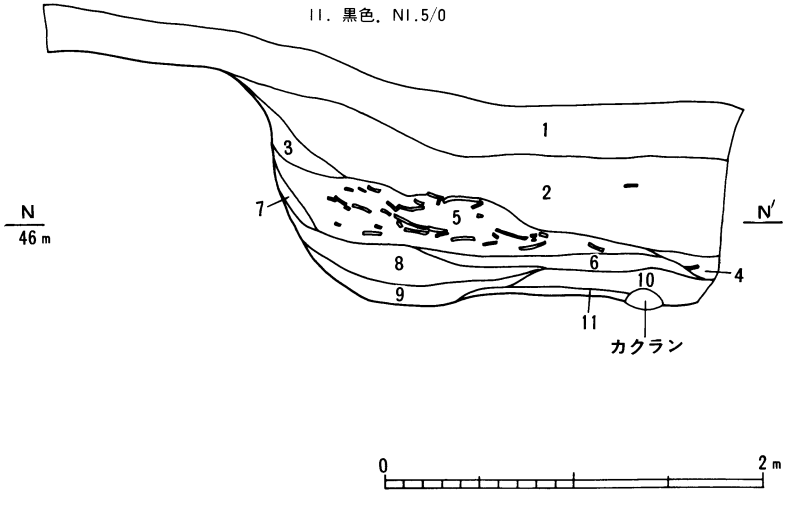
1．黒褐色．10YR2/2．耕作土
2．黒色．10YR2/1．細礫まばらに含む．耕作土
3．黒色．10YR1.7/1．しまりなし
4．黒色．10YR1.7/1．しまりなし
5．黒色粘質．10YR2/1．砂粒縞状に水平堆積
6．黒色．N2/0
7．黒色．N2/0．黄褐色粒子混入
8．黒色粘質．N1.5/0
9．黒色．N1.5/0．黄褐色粒子含む

SD06



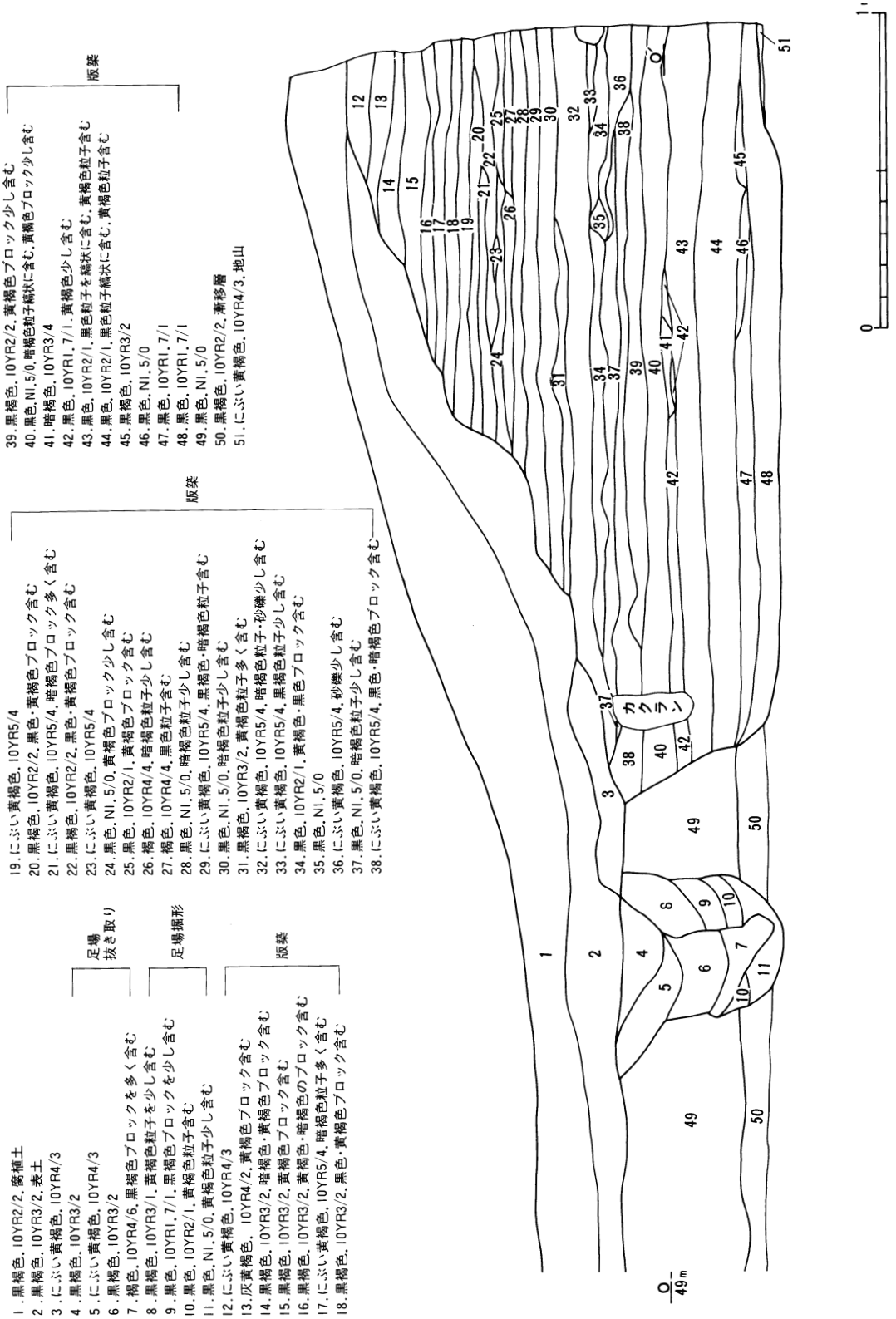
1．黒色．10YR2/2．耕作土
2．黒色．10YR2/1．耕作土．細礫まばらに含む
3．明黄褐色砂．10YR6/6．攪乱層
4．黒色．2.5Y2/1．攪乱層
5．灰黄褐色．10YR4/2．攪乱層
6．黒褐色．10YR3/1．攪乱層
7．黒色．10YR1.7/1．攪乱層．暗褐色・黄褐色ブロック混入．礫多い
8．黒色．10YR2/1
9．にぶい黄褐色砂質。10YR5/4

SD07



1．黒色．10YR2/2．表土
2．黒色．10YR2/2．細礫・瓦片少量含む
3．黒色．10YR2/1
4．黒色．10YR1．7/1
5．黒色．10YR2/2．瓦多い．細礫・黄褐色粒子含む
6．黒色．10YR2/1
7．黒色．10YR2/1．黄褐色粒子含む
8．黒褐色．10YR3/1．明黄褐色粒子含む
9．黒褐色．10YR3/1．明黄褐色粒子多い
10．黒褐色．10YR3/1．明黄褐色粒子多い
11．黒色．N1.5/0

第19図SD04・06・07土層断面（縮尺1/40）



第 20 図基壇版築土層断面（縮尺 1/20）

【６ＡＪＤ－Ａ】

6AJA-A 区同様、地目は畑地で同区の南約 16m の地点に調査区を設けた。SBO3・SCO1 などを含む山林部分の東南部は : 藤岡氏の調査当時南へ細長く延びていたことが知られている。そこで、かつて存在したこの張り出し部分と「B 地点」の西限を確認するために当調査区を設定した。6AJA-D 地区同様、耕作のため置き土がなされている。遺構確認は耕作土を 0.3 ～ 0.4m 除去した黄褐色地山上面で実施した。その結果、SDO5・06 の延長部分と溝 SDO8、土壙 SKO2 が検出された。調査区西半は撹乱が激しく、礫や瓦片を廃棄した現代の土墳が数か所見られた。

SDO5　幅 2.2m、深さ 0.5m。6AJA-D 地区から見るとやや東に振れており、その角度は部およそ N1°　W である。遺物の大部分は瓦類がほとんどでその他土師器・須恵器などの土器類を少量含む。

SDO6　遺構検出のみ行い、掘削は行わなかった。SDO5 との距離は 3.1m で、6AJA-D 地区と比べ狭くなっており、角度は N2°　E である。

SDO8　幅 1m、深さ 0.05m の南北溝で、非常に残りが悪い。黒色土の埋土を有する。遺物は出土しなかった。

SKO2　縄紋時代中期の土壙。楕円形を呈し、長径 0.93m、短径 0.64m、深さ 0.22m。埋土は褐色土で、縄紋土器片が 1 点出土した。

2. 出土遺物

出土遺物には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器・灰粕陶器・縄紋土器がある。瓦類が一番多く、土嚢袋に約 100 袋出土した。遺物の大半は SDO5、SDO7、SCO1 の東西から出土した。国分寺同様、遺物整理は未完であるため紹介した遺物は一部分である。丸瓦 (第 21 図 78 ～ 81)2 種類に大別できた。

2 類 (78 ～ 79)　幅の狭いもの。78 は玉縁凸面に水切り突帯を有する。2 例とも胴部凸面には縄目叩き痕をわずかにとどめる。

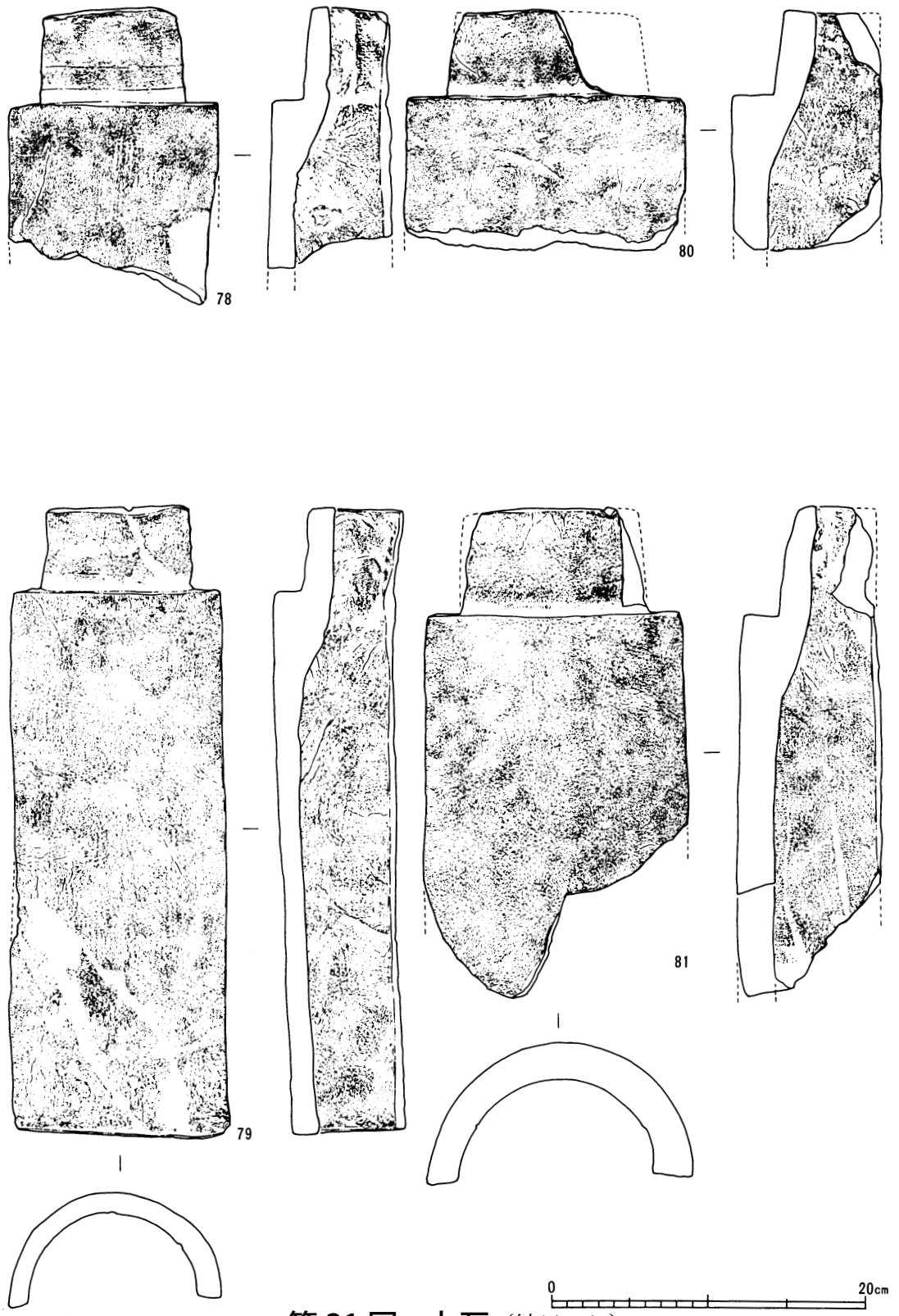
3 類 (80 ～ 81)　幅の広いもの。80 の胴部外面は回転調整される。

平瓦 (第 22 図 82、第 23 図 83、第 24 図 84、第 25 図 85・86、第 26 図 87、第 27 図 88、第 28 図 (89・90)　大きさにより 2 種類に大別できる。

2 類 (82 ～ 86)　小振りで狭端側と広端側の区別が容易なもの。82 は狭端側が極端に狭い。凹面は横に板撫で調整され凸面は丁寧に叩き調整される。側縁の面取りは丸みを帯びる。83 ～ 85 の叩き調整はやや粗く、糸切り痕をよくとどめる。83 の凸面狭端付近中央には 27 × 50 × 2mm の窪みを有する。85 の凸面には赤色顔料が付着する。86 の凸面は掌による押圧調整が施される。

3 類 (87 ～ 89)　大振りのもの。曲率が大きく分厚い。凹面は横に板撫で調整され、凸面は縄目叩き調整される。87 ～ 88 は広端右側を欠く。

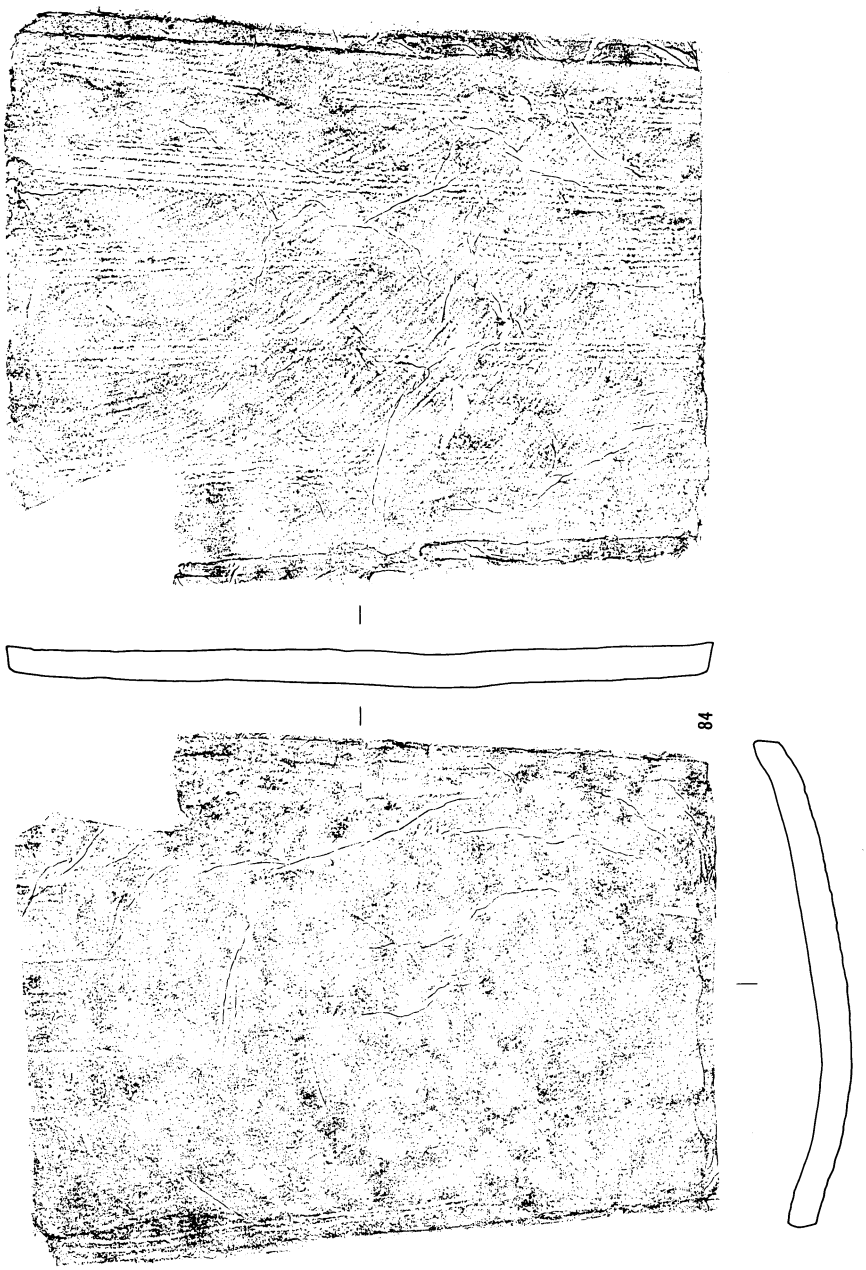
その他 (90)　凸面に隅丸方形を呈する刻印を有するが、判読不明。



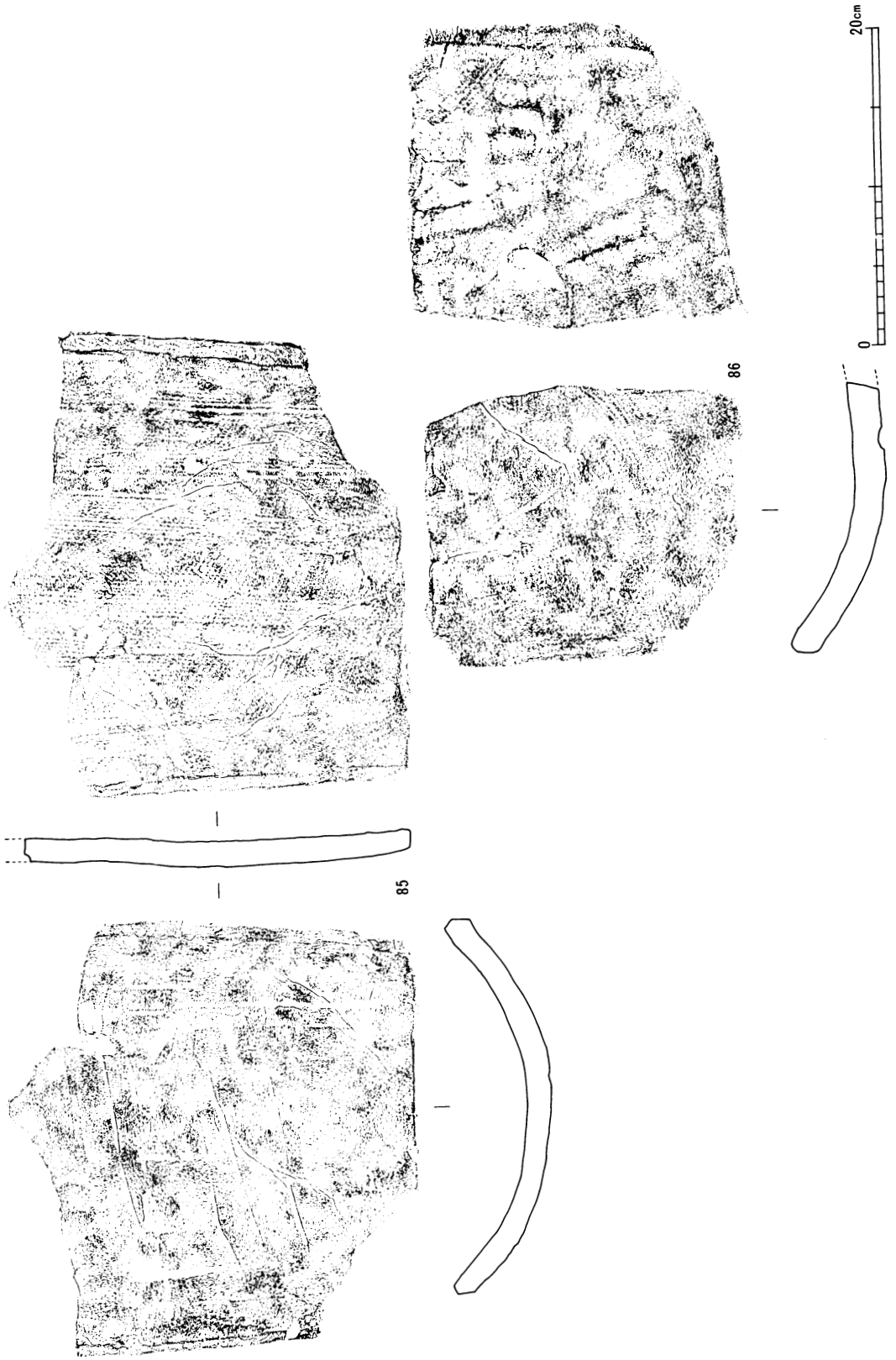
第 21 図　丸瓦（縮尺 1/4）
（78・81－６ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05、79－ＳＤ07、80－６ＡＪＡ-Ａ-1）

第 22 図　平瓦（縮尺 1/4）（82－6ＡＪＡ-Ａ-1）

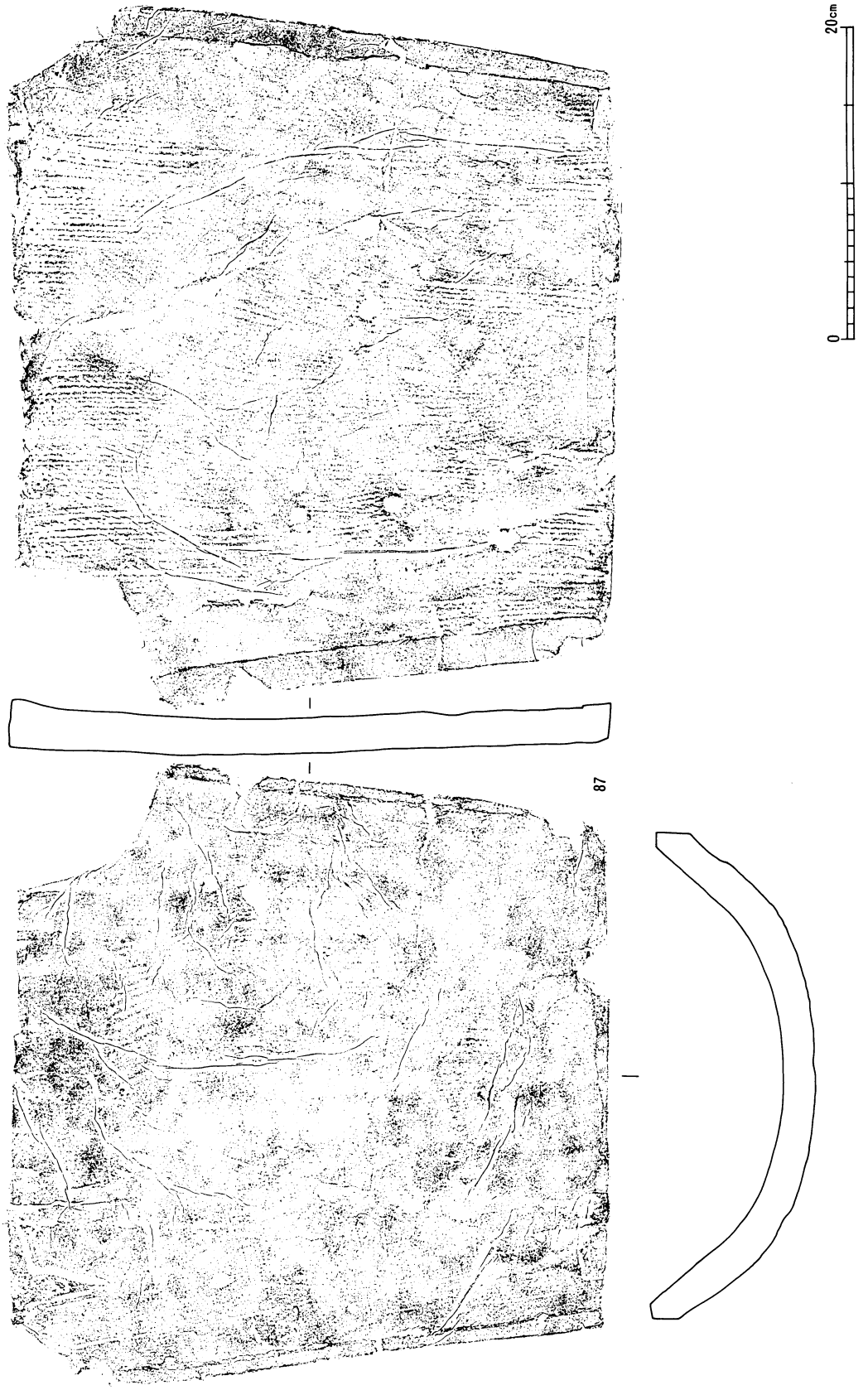
第 23 図　平瓦（縮尺 1/4）（83－6ＡＪＡ-Ａ-3）



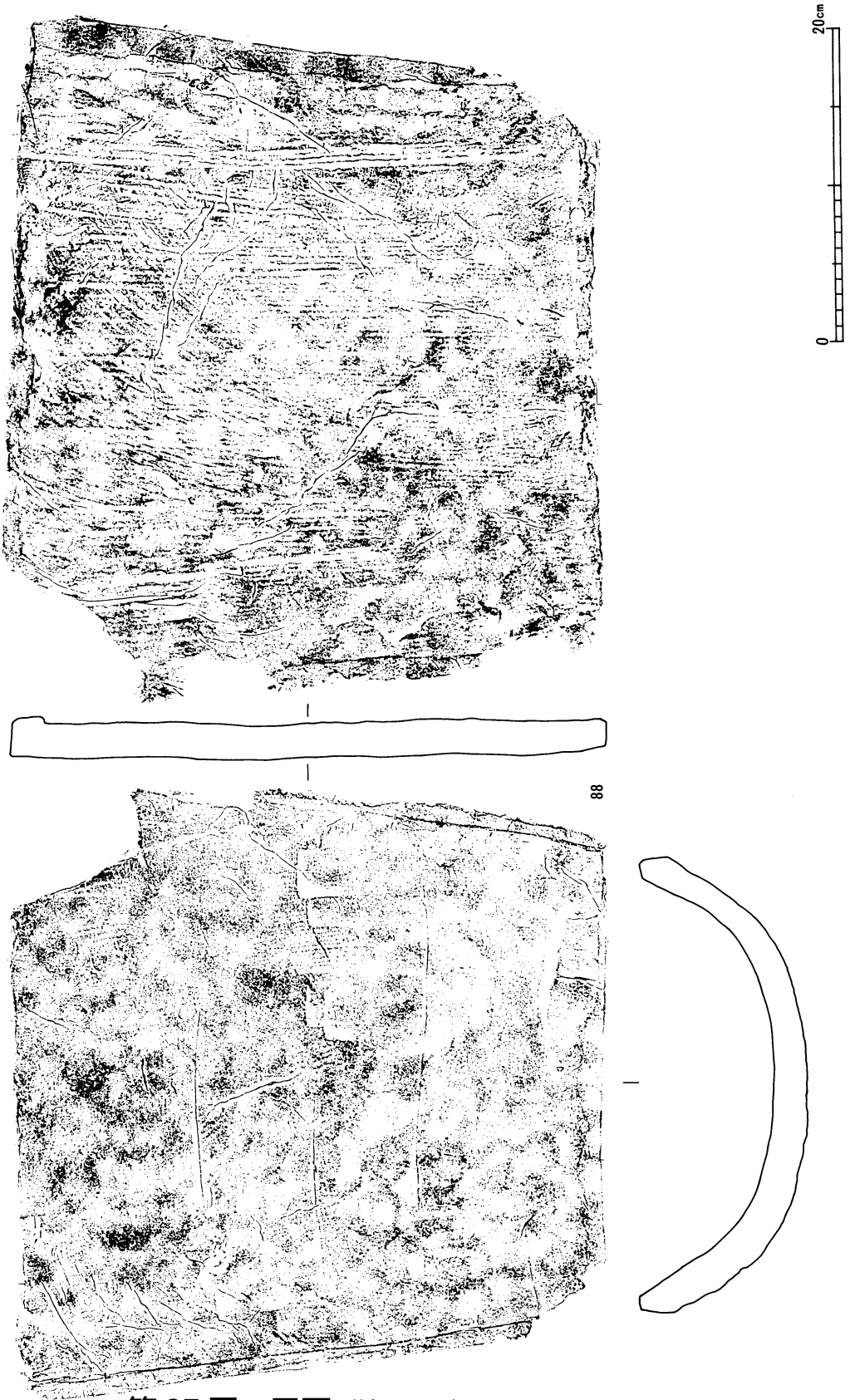
第 24 図　平瓦（縮尺 1/4）（84－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）



第 25 図　平瓦（縮尺 1/4）（85－６ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05、86－６ＡＪＡ-Ａ-1）

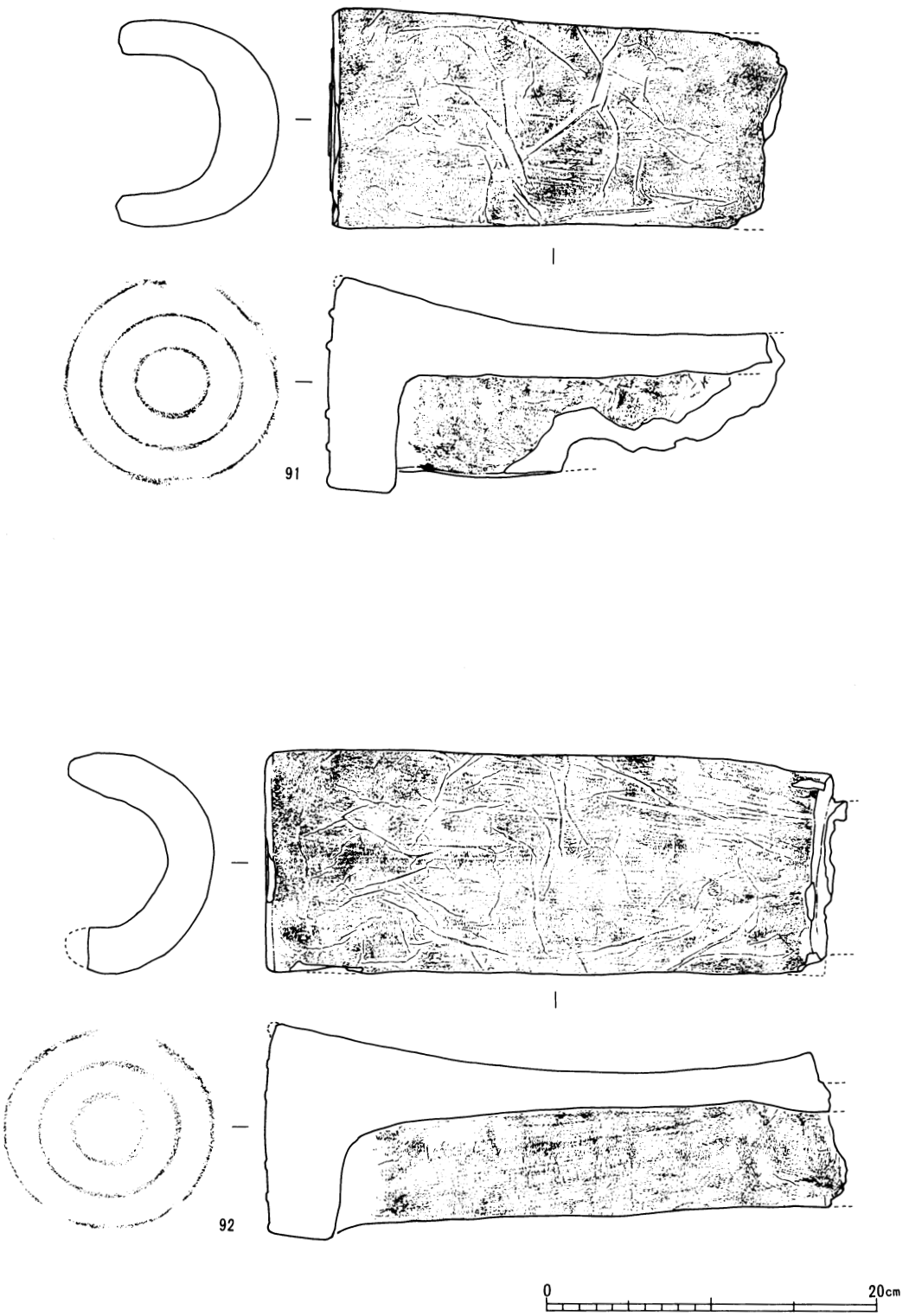


第 26 図　平瓦（縮尺 1/4）（87－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）

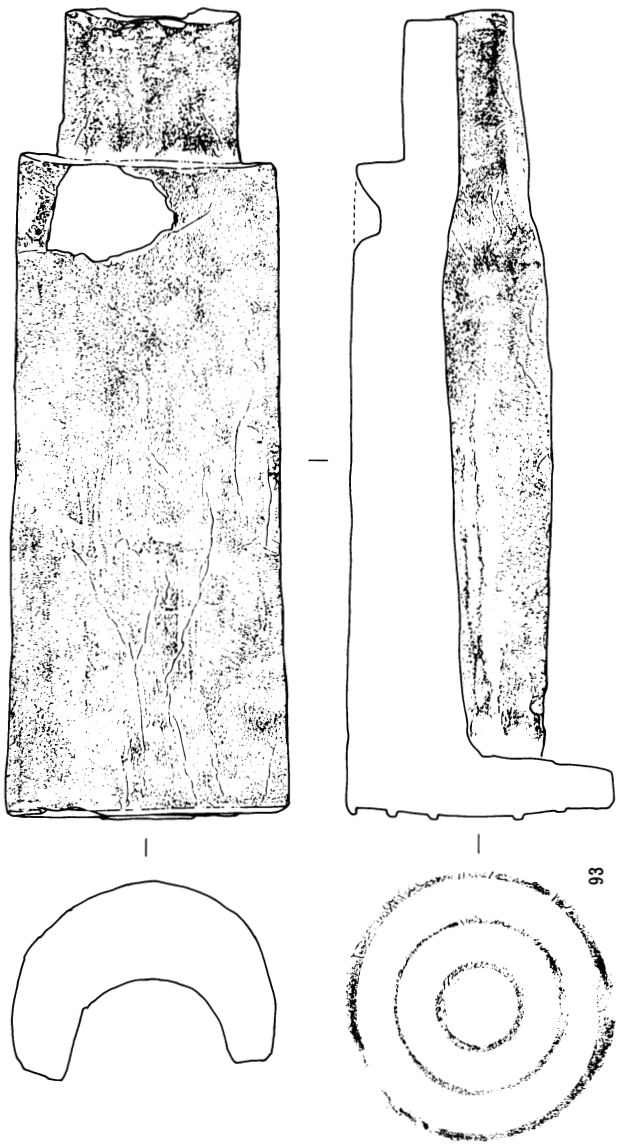


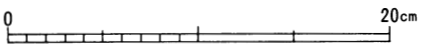
第 27 図　平瓦（縮尺 1/4）（88－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）

第 28 図　平瓦（縮尺 1/4）（89－６ＡＪＡ-Ａ-3、90－６ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）

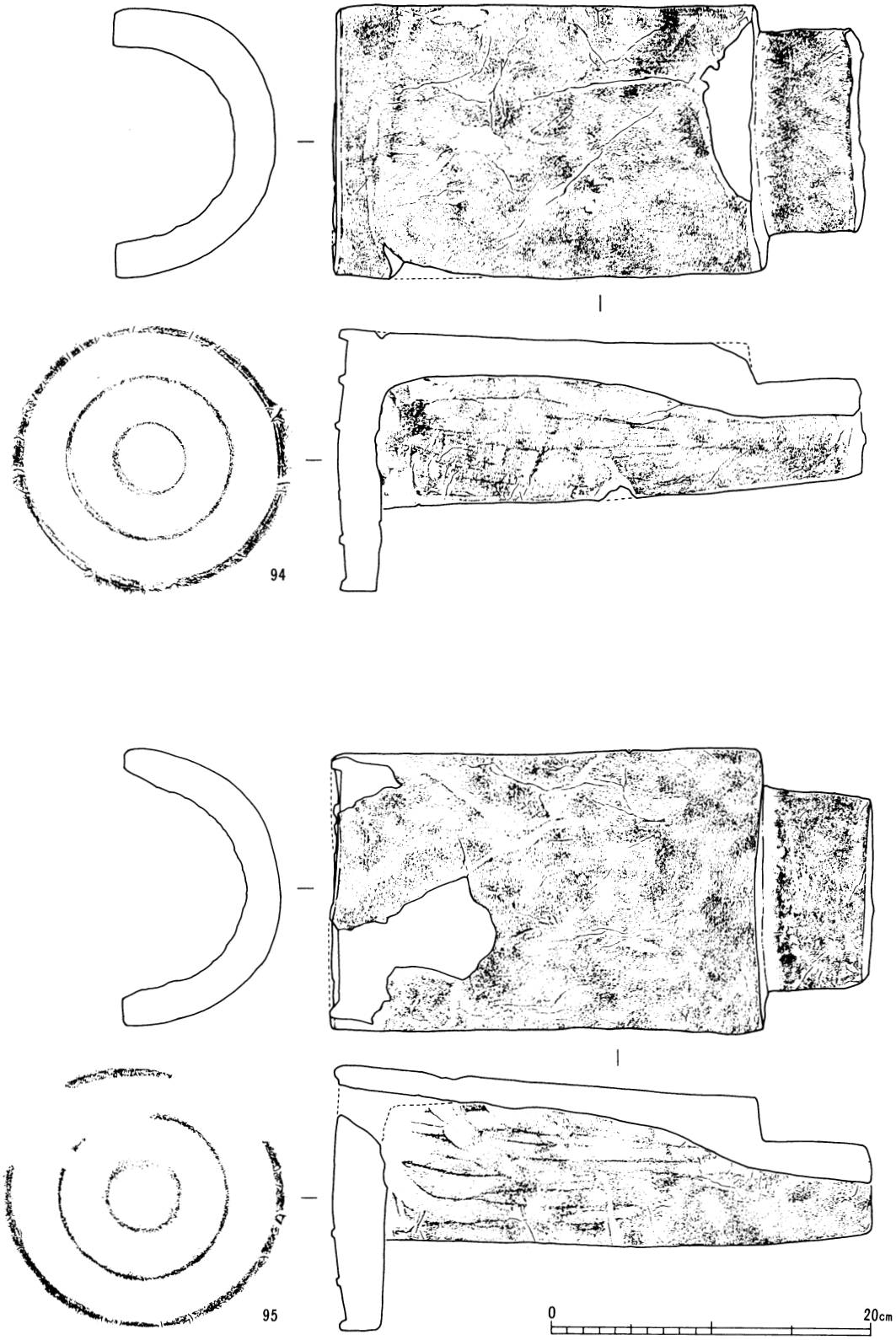


第 29 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）（91～92－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）

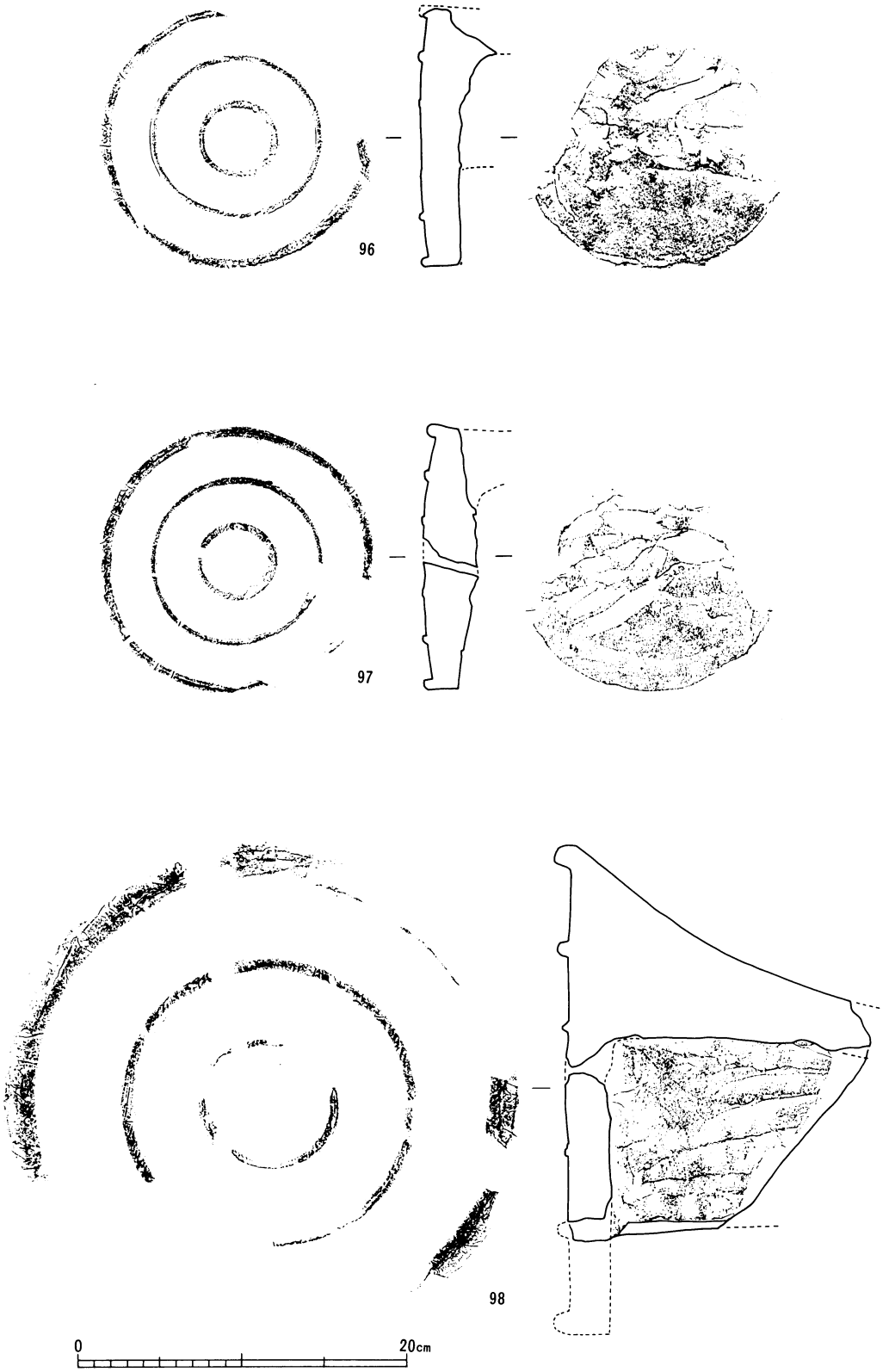




第 30 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）（93－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）



第 31 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）（94～95－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）



第 32 図　軒丸瓦（縮尺 1/4）（96～98－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）

第 3 表　長者屋敷遺跡丸瓦計測表

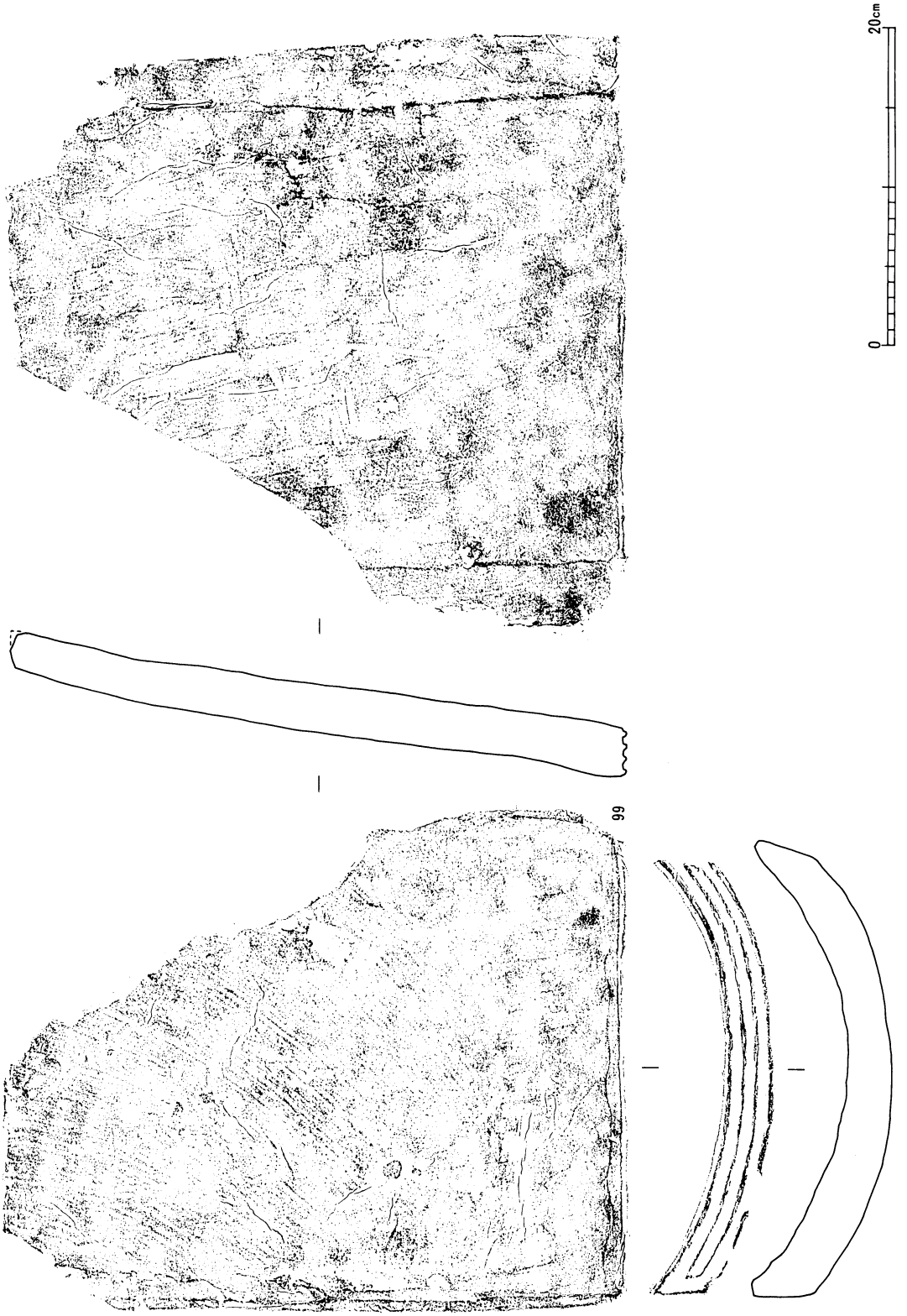
個体番号	全長	最大幅	最大高	広端厚	玉縁幅	玉縁高	玉縁長	玉縁厚	色調	硬度
78	—	135	80	—	93	56	60	10	7.5 Y 5/1	並
79	410	137	83	18	98	65	53	16	N 4/0	軟
80	—	180	—	96	—	69	55	21	2.5 Y 4/1	並
81	—	170	94	—	121	61	71	11	2.5 Y 8/3	やや軟

第 4 表　長者屋敷遺跡平瓦計測表

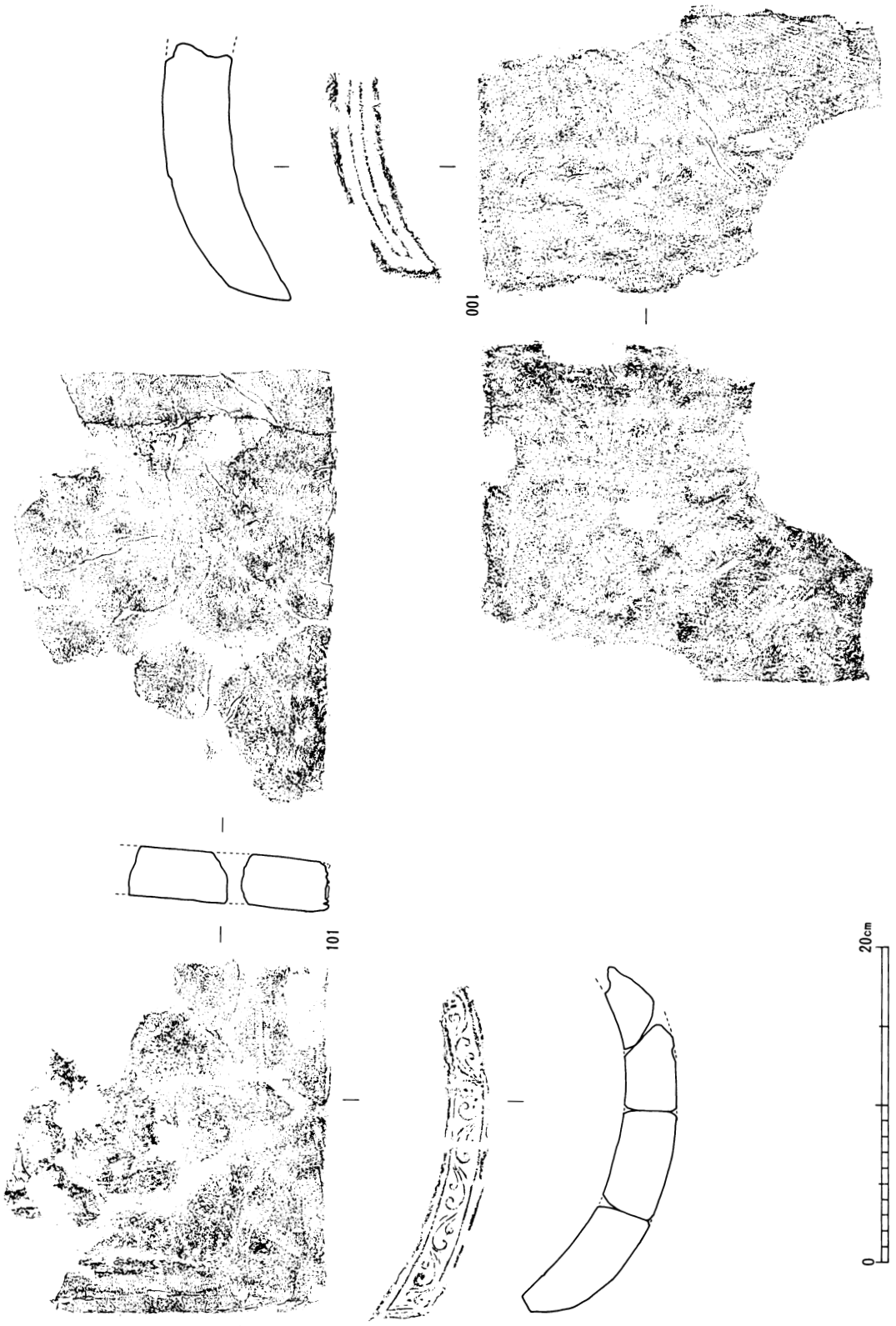
個体番号	全長	広端幅	広端厚	狭端幅	狭端厚	最大高	色調	硬度
82	347	—	13	184	15	59	N 3/0	やや硬
83	351	252	23	—	15	62	2.5 Y 7/2	軟
84	371	—	14	235	16	50	2.5 Y 6/1	硬
85	—	—	—	—	11	—	2.5 Y 6/2	硬
87	381	—	31	286	22	104	N 4/0	硬
88	378	—	26	—	18	107	N 4/0	並
89	386	—	—	—	—	90	2.5 Y 7/3	やや軟

第 5 表　長者屋敷遺跡軒丸瓦計測表

個体番号	瓦当面								全長	玉縁			色調	硬度
	直径	厚さ	第一圏内径	第二圏内径	内区径	外縁幅	外縁高	外縁特長		長さ	幅	孤高		
91	134	49	39	80	118	8	3	傾斜縁	—	—	—	—	10YR8/3	並
92	133	53	38	80	117	8	2	〃	—	—	—	—	5Y4/1	並
93	147	36	40	85	132	8	4	傾斜縁	431	75	97	65	2.5Y8/3	やや軟
94	168	22	40	97	153	8	5	直立縁	328	68	130	66	5Y6/1	並
95	172	33	42	99	157	8	6	〃	341	68	130	65	5Y3/1	やや軟
96	164	22	40	96	148	8	6	〃	—	—	—	—	5Y6/1	硬
97	164	30	40	96	148	7	5	〃	—	—	—	—	5Y6/1	硬
98	296	23	70	164	270	14	11	直立縁	—	—	—	—	2.5Y8/1	軟



第 33 図　軒平瓦（縮尺 1/4）（99－6ＡＪＡ-Ｄ：ＳＤ05）



第 34 図　軒平瓦（縮尺 1/4）（100 ～ 101 － 6AJA-A-1）

第 6 表　長者屋敷遺跡軒平瓦計測表

個体番号	瓦当面 上弦幅	下弦幅	孤深	厚さ	第一廓内幅	内区幅	脇幅	上外縁幅	上外縁高	下外縁幅	下外縁高	外縁特長	全長	狭端部 幅	弦高	厚さ	色調	硬度
99	—	276	—	30	4	20	6	4	3	4	3	直立縁	392	—	—	—	5PB5/1	やや硬
102	—	333	—	44	6	29	6	7	2	8	2	傾斜縁	326	—	—	—	N3/0	並
103	—	—	—	44	5	29	5	6	2	9	2	傾斜縁	—	—	—	—	2.5Y7/3	並
104	—	345	89	44	6	29	7	7	2	9	2	傾斜縁	—	—	—	—	2.5Y8/2	やや硬
101	—	—	—	31	—	16	3	3	3	3	3	直立縁	—	—	—	—	7.5YR7/4	軟

軒丸瓦 (第 29 図 91 ～ 92、第 30 図 93、第 31 図 94 ～ 95、第 32 図 96 ～ 98)　全て 2 重圏紋である。大きさにより以下の 4 種類に大別できる。

1 類 (91 ～ 92)　瓦当面径 133 ～ 134mm で厚さは 49 ～ 53mm。胴部は大きく外反する。凹面・凸面ともによく似た工具で調整され、他の 2 ～ 4 類と異なる。一本造りによると思われる。

2 類 (93)　瓦当面径 147mm、全長 431mm。胴部は厚さ 43 ～ 68mm と分厚い。胴部と玉縁部の凸面は縦に調整され、凹面は : 丸みを帯びた小刀状工具によって縞状に削られている。一本造りにより成形されている。

3 類 (94 ～ 97)　瓦当面径 164 ～ 172mm、全長 328 ～ 341mm。胴部及び玉縁凸面は縦に削られ、胴部凹面と瓦当裏面は丸みを帯びた小刀状工具によって調整されている。一本造りによる。図化した 4 例とも、第 1 圏線の一部が潰れたような形状を呈している。この特徴は笵そのものの形状に由来するものらしく、4 例とも同笵資料と考えられる。

4 類 (98) 瓦当面径 296mm の大型資料。胴部は大きく反り上がる。凸面は縦に削られ、凹面の調整は 3 類などと同様である。6AJA-D 区 SDO5 から 1 点のみ出土した。

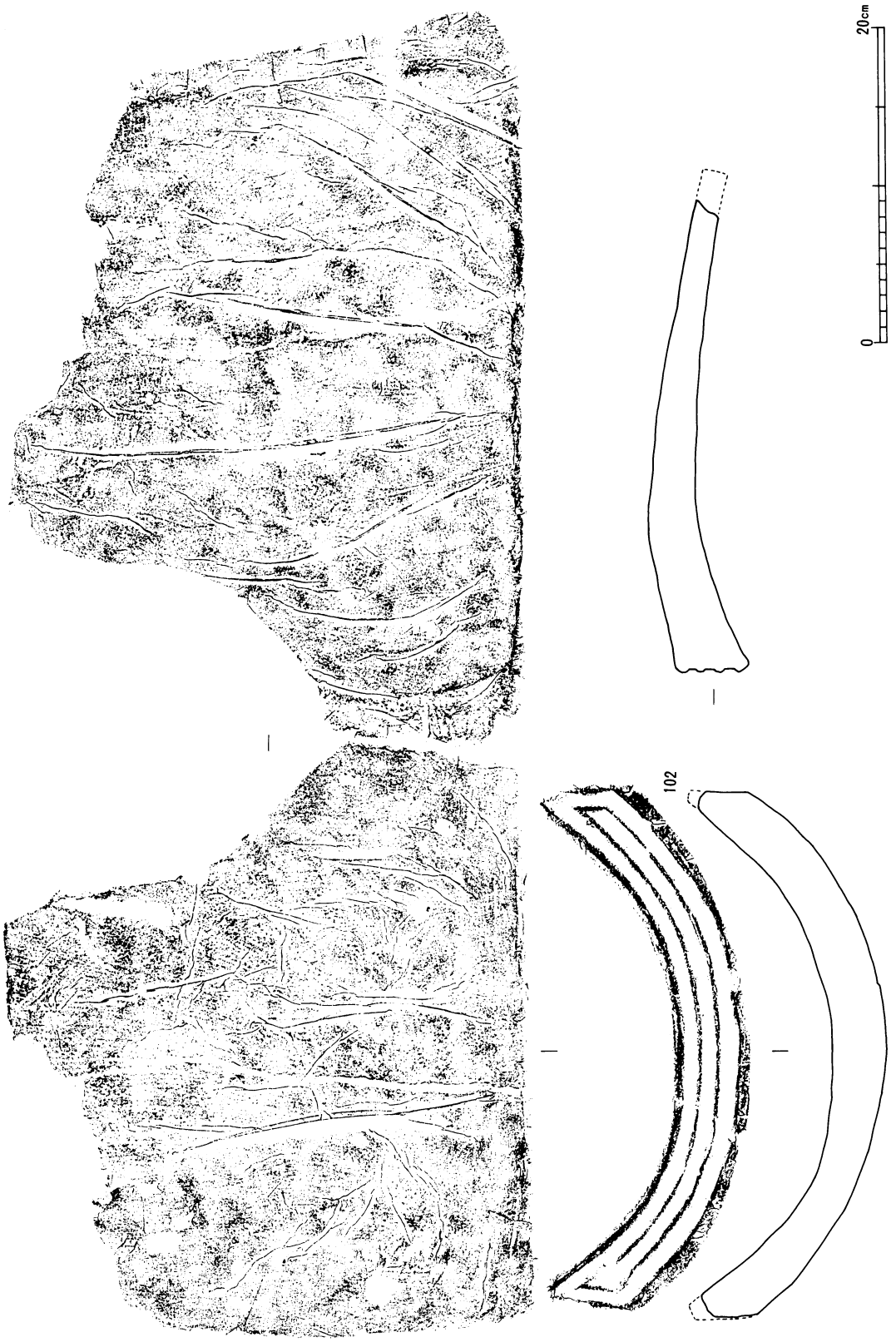
軒平瓦 (第 33 図 99、第 34 図 100 ～ 101、第 35 図 102、第 36 図 103、第 37 図 104)

重廓紋 2 種 (1・2 類) と唐草紋 1 種 (3 類) がある。

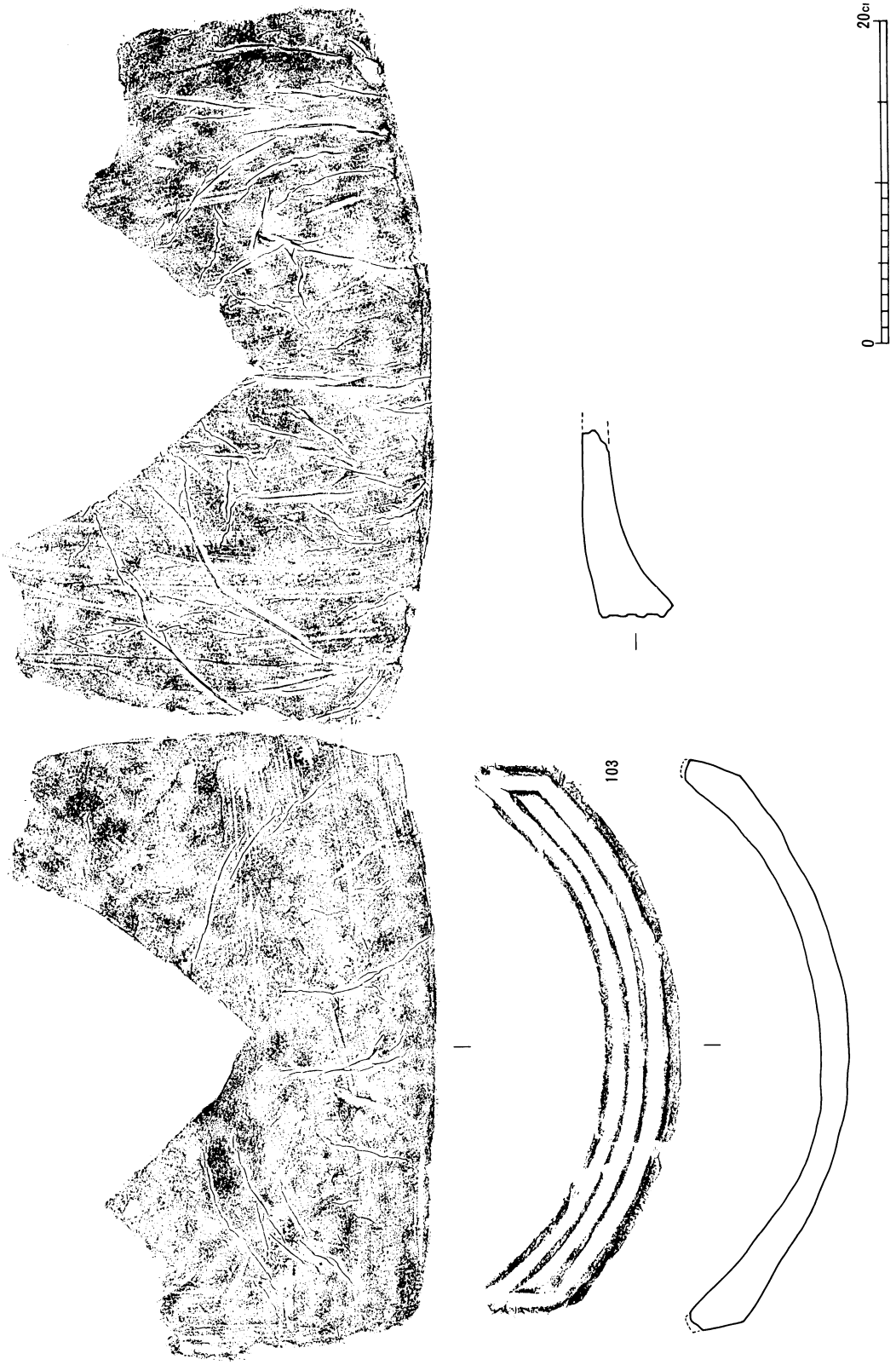
1 類 (99 ～ 100)　直線額の 1 重廓紋軒平瓦。瓦当面下弦幅 276mm、厚さ 30mm、全長 392mm。凹面広端側は縦に短く削られ、瓦当面に接する部分のみ : 横に削られる。凸面は縦に削られ広端付近は = 横に削られる。SCO1(軒廊) 付近での出土が目立った。

2 類 (102 ～ 104)　曲線額の 1 重廓紋軒平瓦。瓦当面下弦幅 333 ～ 345mm、厚さ 44mm、全長 326mm。平瓦部の曲率は大きい。凹面の瓦当面側は横方向に、凸面は縦に調整される。凸面には赤色顔料の付着するものが多い。

3 類 (101)　唐草紋。瓦当面厚 31mm。直線額。4 回反転の均整唐草紋で外区文様をもたない。平城宮 6719A と同一型式である。SCO1(軒廊) 東側で 1 個体のみ出土した。



第 35 図　軒平瓦（縮尺 1/4）（102 − 6AJA-D:SD05）



第 36 図　軒平瓦（縮尺 1/4）（103 − 6AJA-D:SD05）

第 37 図　軒平瓦（縮尺 1/4）（104 − 6AJA-D:SD05）

土師器坏(第38図105～106)　105は口径142mm、高さ29mm。やや窪んだ底部を有し、口縁端部は小さく外反する。底部外面は削りののち撫でられ、口縁端部は横撫でされるが一部磨きをとどめる。106は口径198mm、高さ38mm。少し窪んだ底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや細まって丸く納まる。内外面とも横撫でされる。

土師器皿(第38図107～109)　107は口径204mm、高さ29mm。体部は厚めの底部から内湾気味に短く立ち上がり、端部は一旦細まったのちやや肥厚して丸く納まる。口縁部は横撫でされるが、底部は不明。108は口径310mm。底部から屈折して斜め上方に立ち上がった体部は直線的で、口縁端部は内側に丸く肥厚する。底部は削りののち磨かれ、口縁部は横撫でされる。109は口径219mm、高さ26mm。口縁部は底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、端部は方形となる。体部外面は削られ、口縁部は横撫でされる。

須恵器蓋(第38図110～117)　111～115は坏蓋。110は推定口径206mm。返りのある坏蓋の細片である。返りは口縁端部より少し突き出る。SCO1(軒廊)付近から出土した。111は頂部の窪んだつまみを有し、内面は硯に転用されている。112は口径148mm、113は口径162mm。ともに、高い天井部を有し、口縁部付近で外方へ屈曲し、端部は下方につまみ出される。113は内面が硯に転用されている。114は口径140mm、高さ23mm。宝珠つまみを有し、天井部は低く平で、体部は余り屈曲することなく直線的に開く。115は口径213mm。体部は極めて低く、口縁端部は短くつまみ出される。116は壺蓋で、口径16.4mm。平らな天井部から内側に屈曲して直線的に開き口縁部に至る。天井部につまみを有するが欠失する。117は口径113mm、高さ34mm。天井部と体部の境は内側に大きく屈曲し、体部と口縁部の境で外側に屈曲し、端部は垂下する。天井部外面は不定方向の削り調整が施される。器種不明であるが、挿図のとおり蓋と考えた。

須恵器坏(第38図118～121)　118～120は高台を有する坏。118は口径152mm、底径112mm、高さ44mm。腰部の稜よりやや奥まったところに角高台がハの字状に取り付き、内側の角が接地する。口縁部はわずかに外反する。119は底径73mm。低いやや崩れた角高台はわずかに外傾する。120は底径90mm。低い角高台を有する。121は無高台の坏。口径137mm、高さ50mm。やや厚めの底部から丸みを帯びながら立ち上がり、わずかに外反しながらも直線的に開き口縁端部に至る。底部のみ狭くへら削りされる。

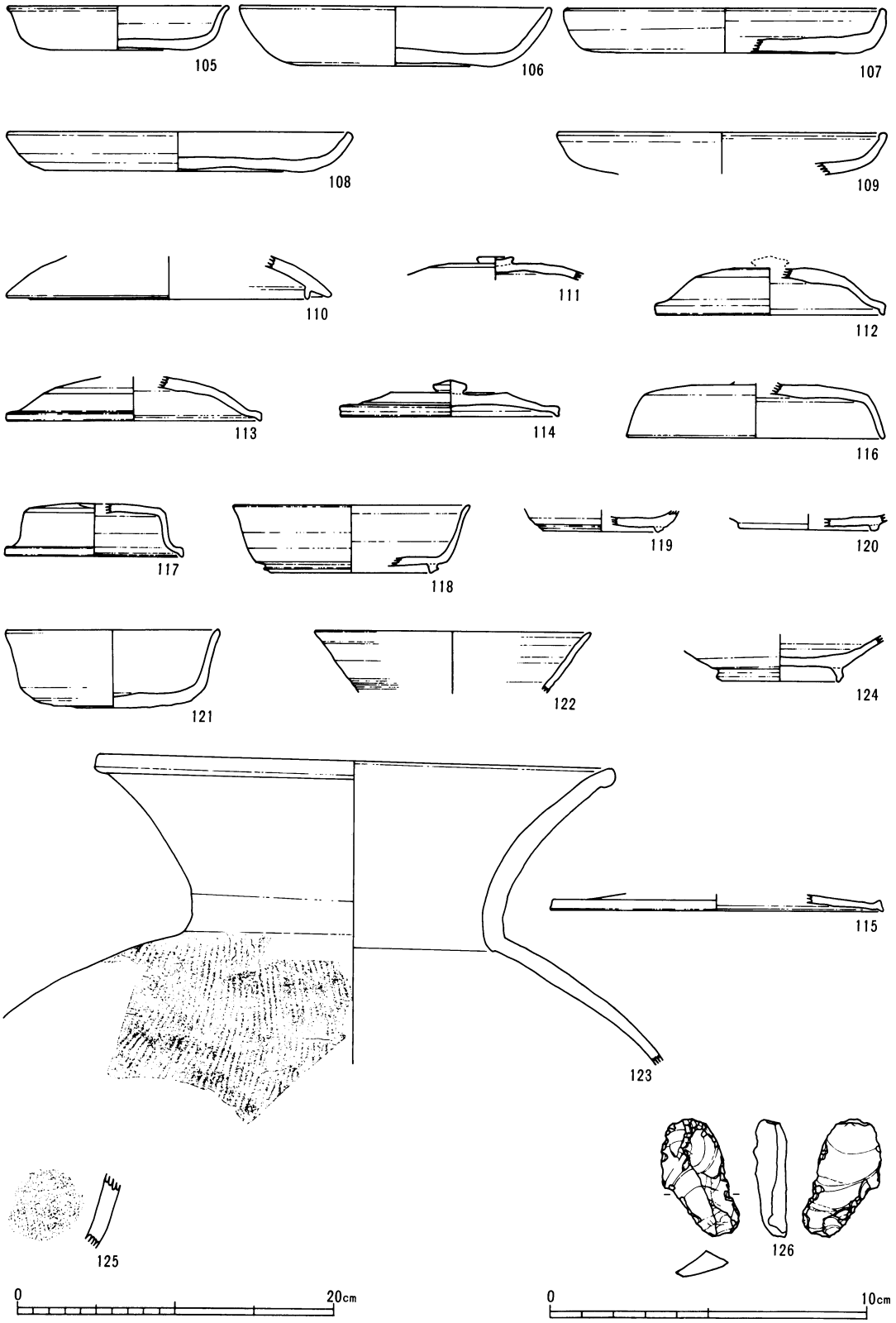
須恵器碗(第38図122)　推定口径176mm。体部は直線的に開き、口縁端部はやや尖りながら丸く納まる。

須恵器甕(第38図123)　口径326mm。頸部は短く直立したのち緩やかに外反し、口縁端部は外側が丸く肥厚する。

灰釉碗(第38図124)　底径76mm。高台は三日月形が崩れ外面に明確な稜を有する。底部には糸切り痕をとどめる。折戸53号窯式併行と考えられる。

縄紋土器(第38図125)　厚さ11mm。外面には条痕を有する。中期中葉のものと考えられる。

剥片(第38図126)　大きめの平坦打面を有する厚めの剥片。長さ38.7mm、幅24.3mm、厚さ10.9mm。背面と主要剥離面の剥離方向は異なり、打撃軸と長軸は一致しない。チャート製。



第 38 図　土器･石器（縮尺 1/4）

（105 ～ 106・108 ～ 109・111 ～ 114・116・119121・123 ～ 124 － 6AJA-D、107・110・115・122 － 6AJA-A-1、118・120 － 6AJA-D：SD5、125 － SK02、126 －表採）

Ⅳ．まとめ

1. 伊勢国分寺跡

今次の調査は国分寺関連施設及び尼寺の確認を目的として調査区を設定したところ、主に 10 世紀以降の遺構が検出され、尼寺の範囲はおろか国分寺関連期の遺構は確認できなかった。

尼寺跡推定地のひとつである現国分町集落に隣接した 6BFE-A 地区では 10 世紀後半以降に形成されたと考えられる瓦廃棄土壙が検出された。このような遺構は第 4 次調査や第 5 次調査などでも確認されている (浅尾 1992・1993)。尼寺跡そのものは未確認とはいえ、その廃絶ないし変容に関わる大きな画期は 10 世紀後半頃に求められそうである。中世以降の掘立柱建物も過去の調査同様検出された。国史跡指定地をのせる安定した高台を中心として、中世以降居住地及び耕地が広がったものとみられる。さらに、第 2 次調査以来明らかなように中世以降の瓦溜まりも継続して随所に見られることから、国分二寺寺域内も徐々に蚕食されていったことが考えられる。今回も、かつての土地区画を示すとみられる溝が多く検出されたが、それらのほとんどは中世以降の埋没が想定される。なかには、座標方位に一致するものもみられ、さらに古い時代の溝を踏襲しているものや古い土地区画に準じて設けられているものもあるであろう。これまで何度も史跡周辺の調査を試みてきたにも関わらず奈良時代単純期の溝は数少ないことからすれば、過去の溝を再利用・再掘削するケースが多かったのかもしれない。

今回出土した遺物の大部分は瓦類で、それらの大半は SK22 などの瓦廃棄土壙から出土したものである。伊勢国分寺跡出土の軒瓦は前身寺院のものも含め型式分類がなされた。

軒丸瓦 9 型式 16 種類、軒平瓦 9 型式 18 種類で (浅尾 1991)、その後軒丸・軒平各々 1 種類ずつ追加された (浅尾 1992)。今回の調査では軒丸瓦 5 種類、軒平瓦 6 種類で、それぞれ型式未認定の新資料を 1 種ずつ含んでいる。これらを含めた型式認定の再考は今後の課題としたい。

さて、伊勢国分寺跡の軒瓦は史跡指定地と北院・南院地区とでそれぞれ異なり、共通のものが含まれないという傾向が指摘されている (浅尾 1992)。今回 6BFE-A 地区で出土した軒丸瓦 21 点の内訳はⅢ E 型式 1 点、Ⅴ B 型式 7 点、Ⅵ型式 7 点、Ⅶ型式及びその亜型式 6 点、軒平瓦では総数 :30 点のうちⅣ A 型式 1 点、Ⅳ Bbc 型式 4 点、Ⅳ C 型式 20 点、Ⅳ D 型式 1 点、Ⅴ A 型式及びその亜型式 3 点、Ⅶ型式 1 点である。これらのうち、北院・南院から出土するのは軒丸瓦Ⅴ B、Ⅳ型式、軒平瓦Ⅳ Bbc、Ⅳ C、Ⅴ A 型式、史跡指定地から出土するのは軒丸瓦Ⅲ E、軒平瓦Ⅳ A 型式であるから、前者に含まれるものが圧倒的に多い。当調査区が現集落のすぐ西隣に位置することからも、おもに北院地区からもたらされたものと考えて矛盾はなく、北院地区に国分尼寺などの奈良時代寺院跡が存在する蓋然性はますます高まった。

今回出土した瓦類でとくに注目されるのは、外区内縁に唐草紋を配する軒丸瓦Ⅶ型式及びその類似型式であろう。これまで出土例数が少ないものであるが、今回はこれまで知ら

れる平坦縁のもの３点と直立縁の付加されるもの３点が出土した。この瓦は飛雲紋系軒瓦の一種とされ近江国府や南滋賀廃寺など近江地方との関連が説かれているものである (竹内 1993)。史跡指定地での出土が全く知られていないことから、北院専用に採用された差し替え瓦という可能性を考えておきたい。

２．長者屋敷遺跡

第２次調査となった今回は、基壇状の高まりを残す遺跡南辺の山林を調査地点に選定し実施したところ、版築工法によって築かれた建物基壇であることが確認された。以前から国府政庁の可能性や近江国府との類似が説かれてきたが、今回の調査により伊勢国府の政庁跡であることが確実となったわけである。礎石は全く抜き取られており、基壇化粧及びその抜取り痕跡も検出されなかったが、礎石掘形の基底部は残存しており、一部瓦地覆をとどめるなど総じて保存状態は良好といえる。調査の結果、後殿 (SBO3) は東西７間 (3.6m × ７間) で、軒廊 (SCO1) は東西１間 (3.6m)、南北５間 (3.0m × ５間) と推定された。後殿と軒廊の境目には土層の不連続が明瞭に観察できることから別個に造営されたことが明かである。ただし、両者の前後関係や造営時期差の程度は明らかにしえなかった。

一般に国府政庁が礎石建物に整備されるのは９世紀にはいってからのことと云われる。軒廊の東西から多量の瓦類に混じって出土した少量の土器類から礎石建物の造営時期を考えてみるならば、明らかに検出遺構に先行すると思われるものを除けば、８世紀後半から10 世紀代までの時間幅が認められそうである。遺物の絶対量の少なさから明言はできないが、伊勢国庁における礎石建物の整備時期は８世紀代に遡る可能性も残される。当地点における政庁の存続時期の下限は正殿・後殿・脇殿等の主要建物を囲続すると考えられる溝 SBO5 から出土した遺物が参考となるかもしれない。SBO5 からは瓦類を中心とした遺物が上層から中程にかけて多量に出土した。これらはあたかも主要建物の廃絶時に一括して投棄された様相を呈し、折戸 53 号窯期併行期の土器を含む。したがって、10 世紀代の廃絶を考えておきたい。一方、先行する建物について後殿の断ち割りを実施しその検出を試みたが、掘立柱建物等は検出されなかった。地表下約 0.4m にわたって掘込地業が認められるため、古い遺構が失われている可能性も十分考えられる。

伊勢国府政庁であることが確認された今回の調査地点は以前からその平面形態が近江国府と類似することが指摘されてきた (村山 1992)。近江では伊勢とは逆に基壇化粧は確認されたが基壇上面はほとんど削平されており , 後殿基壇の規模は東西 27.91m、東西内閣築地間の距離は 72.8m であった (丸山ほか 1977)。これに対して伊勢では、軒廊を中軸として推定するならば、後殿基壇東西約 34m、東西内閣間約 80m となる。ただし、後殿基壇に関しては基壇まわりが流出し、その結果、本来の形状を大きくうわまわっている可能性が高い。建物規模とのバランスも考慮すればもう少し小さく考えるべきかもしれない。調査面積の少ない現時点では規模・形態ともに近江に近いものと捉えておきたいが、北東及び北西の建物基壇や正殿・脇殿の配置など今後の調査の進展によっては様々な相違点が

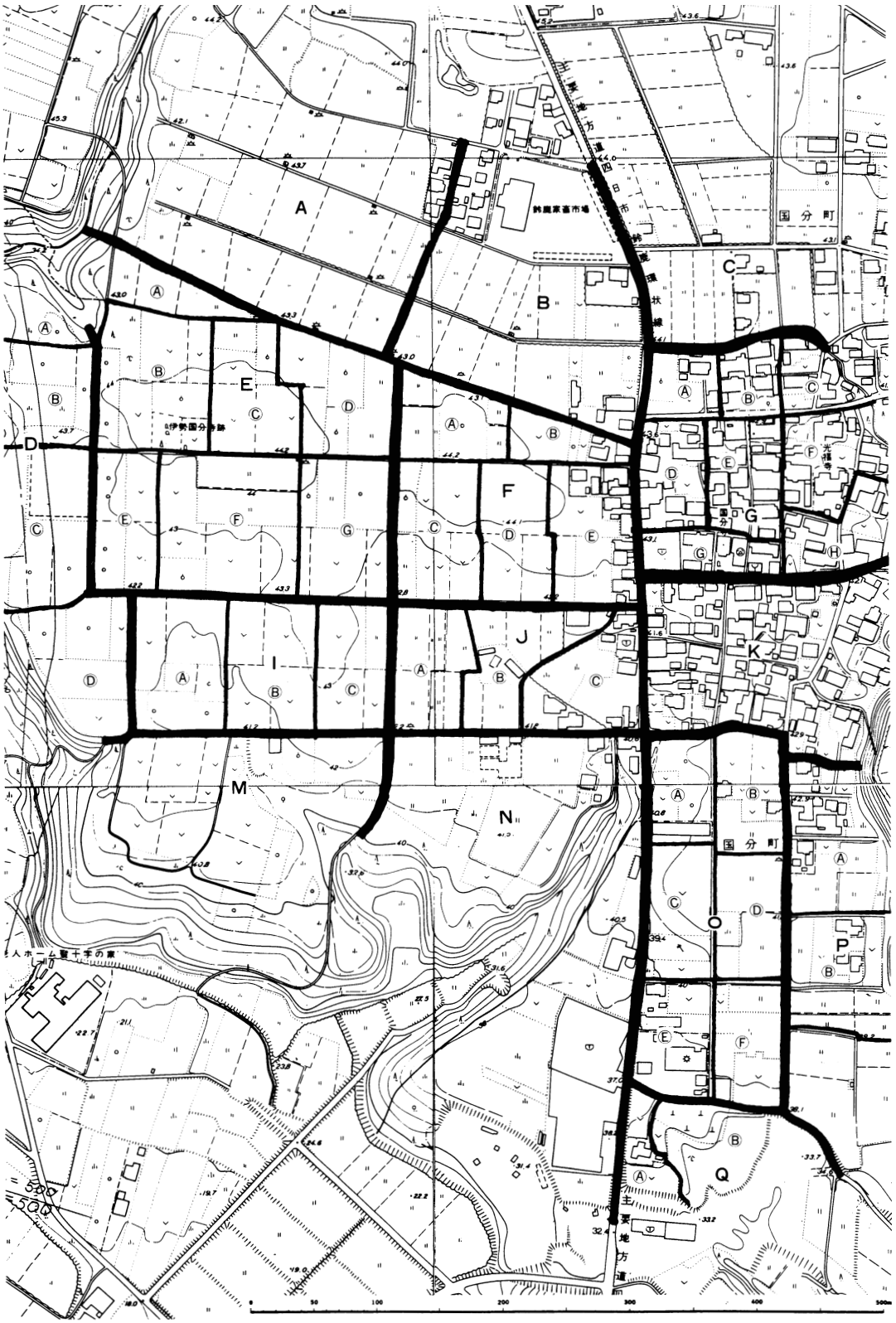
明らかになることも考えられよう。本次調査地点の北約 200m には同じく軒瓦が分布する地点があり、こちらが政庁であるとの考えもある (浅尾 1993)。こうした説は今回の調査結果により決して否定されたわけではなく、政庁域の確認と合わせてこれら周辺地域の調査も実施していきたい。

さて、長者屋敷遺跡の軒瓦は軒丸瓦が 5 種類、軒平瓦が 3 種類程知られてきた。軒丸瓦は瓦当径が 180mm、165mm、128mm のもの (村山 1992)、神戸高校保管の完形資料 (浅尾 1993 第 16 図 1)、中央に珠点をもつもの (藤岡ほか 1957) の 5 種で、軒平瓦は重廓紋 2 種と素紋縁均整唐草紋 1 種 (村山 1992) である。今回出土した軒丸瓦のうち 1・3 類は村山論文の後 2 者、2 類は神戸高校の資料にあたり、4 類は初出資料である。全て 1 本造りにより製作されており、瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて刃先の丸いヘラ状工具によると思われる縦方向の調整が特徴的である。4 類は瓦当径が 296mm にも及ぶもので、こうした大型資料は通常の軒先に用いられたとは考えられず、大棟や降棟など限られた場所で用いられたことが考察されている (森ほか 1976)。一方、軒平瓦は全て既出のもので、平城宮 6719A 型式と同笵と考えられる 3 類は SCO1 軒廊の東で 1 個体分のみ出土した。1・3 類はともに直線顎で軒廊附近に分布の中心があり、さらにこれらに対応すると考えられる小型の平瓦 2 類も同様の分布傾向が窺える。

当遺跡の重圏紋軒丸瓦・重廓紋軒平瓦は難波宮式系軒瓦として捉えられ、伊勢地方で出土する同種瓦の分布から聖武天皇の伊勢行幸との関連が指摘されている (竹内 1993)。こうした考察は今回検出された礎石建物の整備時期との関連からも興味深い。ただし、難波宮や平城宮のものが 3 重圏紋であるのに対し、当遺跡を含む伊勢地方の諸例は 2 重圏紋であるという意匠の違いがある。よって、直接移入されたものとは云いがたく、同種瓦採用にあたってはなお複雑な背景が想定される。伊勢地方に分布する難波宮式系瓦の詳細な比較検討は当遺跡出土資料の型式認定も含め今後の課題としたいが、萩原裏ノ山遺跡出土の重圏紋軒丸瓦は圏線間の比率からみて明らかに型式を異にする。今回の軒丸瓦 3 類は第 1 圏線が一部潰れるという顕著な特徴を有することから、笵の異同の判断は比較的容易かもしれない。近隣における重圏紋軒丸瓦は萩原裏ノ山遺跡のほか伊勢国分寺跡や八野遺跡 (八野廃寺) の例が知られる。これら両遺跡から出土している 12 葉蓮華紋軒丸瓦 (伊勢国分寺跡軒丸瓦Ⅴ B 型式) や均整唐草紋軒平瓦 (同軒平瓦Ⅳ Bb・c 型式) を介して、互いに共通項をもたない長者屋敷遺跡と同一郡内所在の川原井瓦窯跡との接点がおぼろげながら認められようか。国庁整備と国分二寺造営との関連は今後の調査の進展や既存資料の整理・検討を通して徐々に明らかにしていくこととしたい。

〔引用・参考文献〕

鈴鹿市教育委員会 (1989)『伊勢国分寺跡調査概要』
鈴鹿市教育委員会 (1990)『伊勢国分寺跡－第 2 次発掘調査概要－』
浅尾悟 (1991)『伊勢国分寺跡－第 3 次発掘調査概要報告』
浅尾悟 (1992)『伊勢国分寺跡－尼寺跡推定地の調査－』
浅尾悟 (1993)『伊勢国分寺跡 (5 次) 長者屋敷遺跡 (1 次)』
村山邦彦 (1992)「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』第 128 号
藤岡謙二郎・西村睦男 (1957)「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群－軍團趾の問題と附近の開獲をめぐって－」『史蹟と美術』第 279 号
阿部義平ほか (1986)「国府研究の現状 (その一)」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 10 集共同研究「古代の国府の研究」
田中喜久雄 (1979)『川原井遺跡発掘調査概要』
奈良国立文化財研究所 (1975)『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ瓦編 2』
森郁夫ほか (1976)『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
丸山竜平ほか (1977)『滋賀県文化財調査報告書第 6 冊　史跡近江国衙跡発掘調査報告』
竹内英昭 (1993)「伊勢地方における官系瓦の分布～奈良時代後半期の軒丸瓦の様相～」『斎宮歴史博物館研究紀要』二
森川幸雄 (1992)「鈴鹿郡関町出土の古瓦」『Mie history』vol.4



第 39 図　伊勢国分寺跡地区表示（縮尺 1/5 千）

第 40 図　長者屋敷遺跡地区表示（縮尺 1/5 千）

写真１

伊勢国分寺跡調査区全景

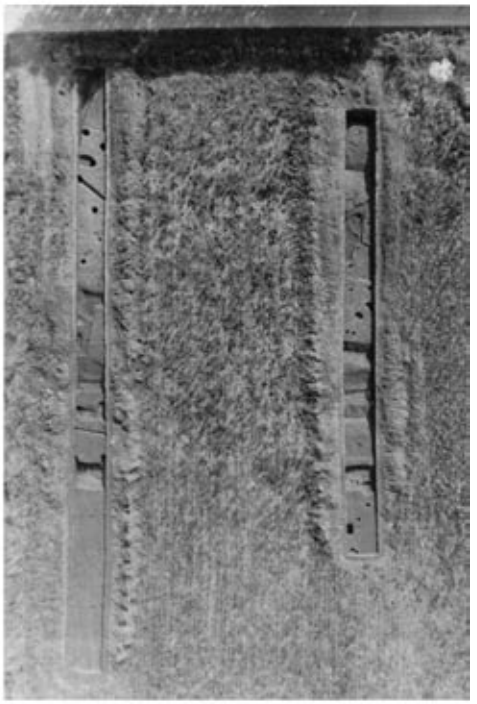
６ＢＦＣ－Ｆ

６ＢＦＥ－Ａ

６ＢＦＣ－Ｃ

写真２

６ＢＧＨ－Ｃ



６ＢＩＢ－Ａ－１・２

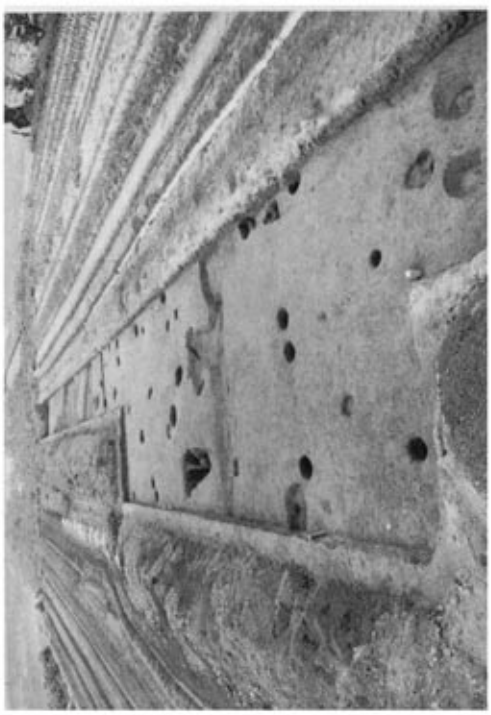
ＳＫ 22 遺物出土状況

ＳＫ 22

写真 3

SB 09

SB 10



SB 11・12

SB 13

写真４

伊勢国府政庁近景

６ＡＨＩ－Ｆ

６ＡＪＡ－Ａ－１（軒廊）

６ＡＪＡ－Ａ－２（後殿）

写真 5

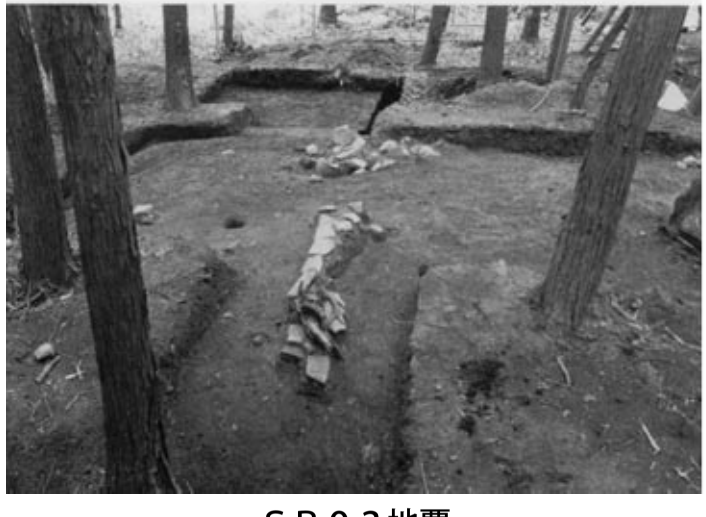
6AJA－A－3

6AJD-D

6AJD-A

SD04

軒廊・後殿接合部



ＳＢ０３地覆

ＳＣ０１遺物出土状況

ＳＣ０１

写真６

ＳＢ０３（後殿）断ち割り

ＳＤ０５

ＳＤ０７遺物出土状況

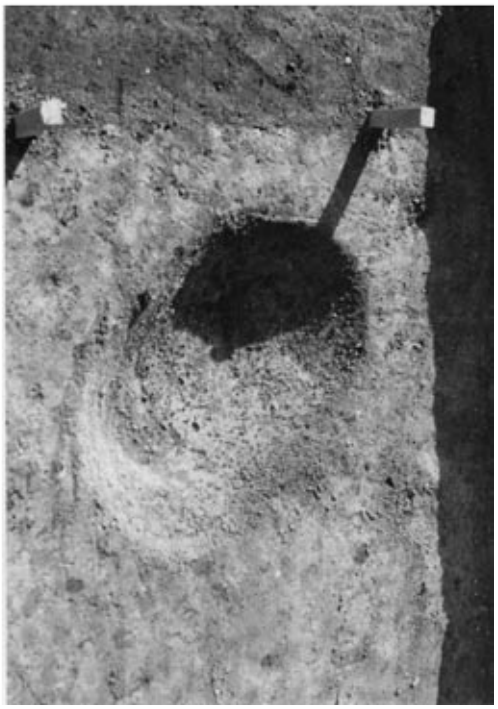
ＳＢ０３断面

写真８

ＳＤ０５遺物出土状況

ＳＤ０５軒瓦出土状況（６ＡＪＡ-Ｄ）

ＳＤ０５軒瓦出土状況（６ＡＪＤ－Ａ）



ＳＫ０２

1

3

2

4

6

8

5

9

10

16

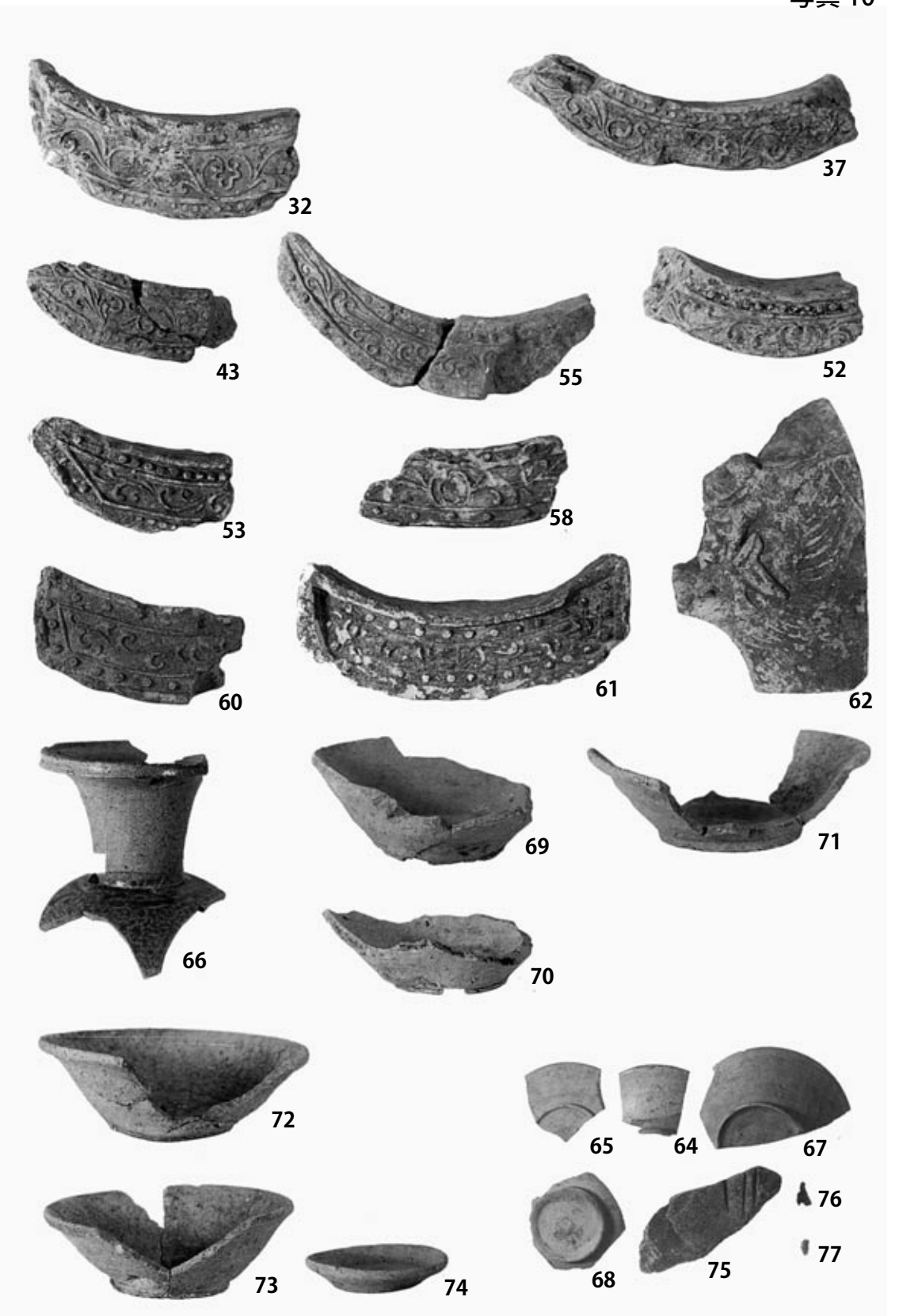
23

17

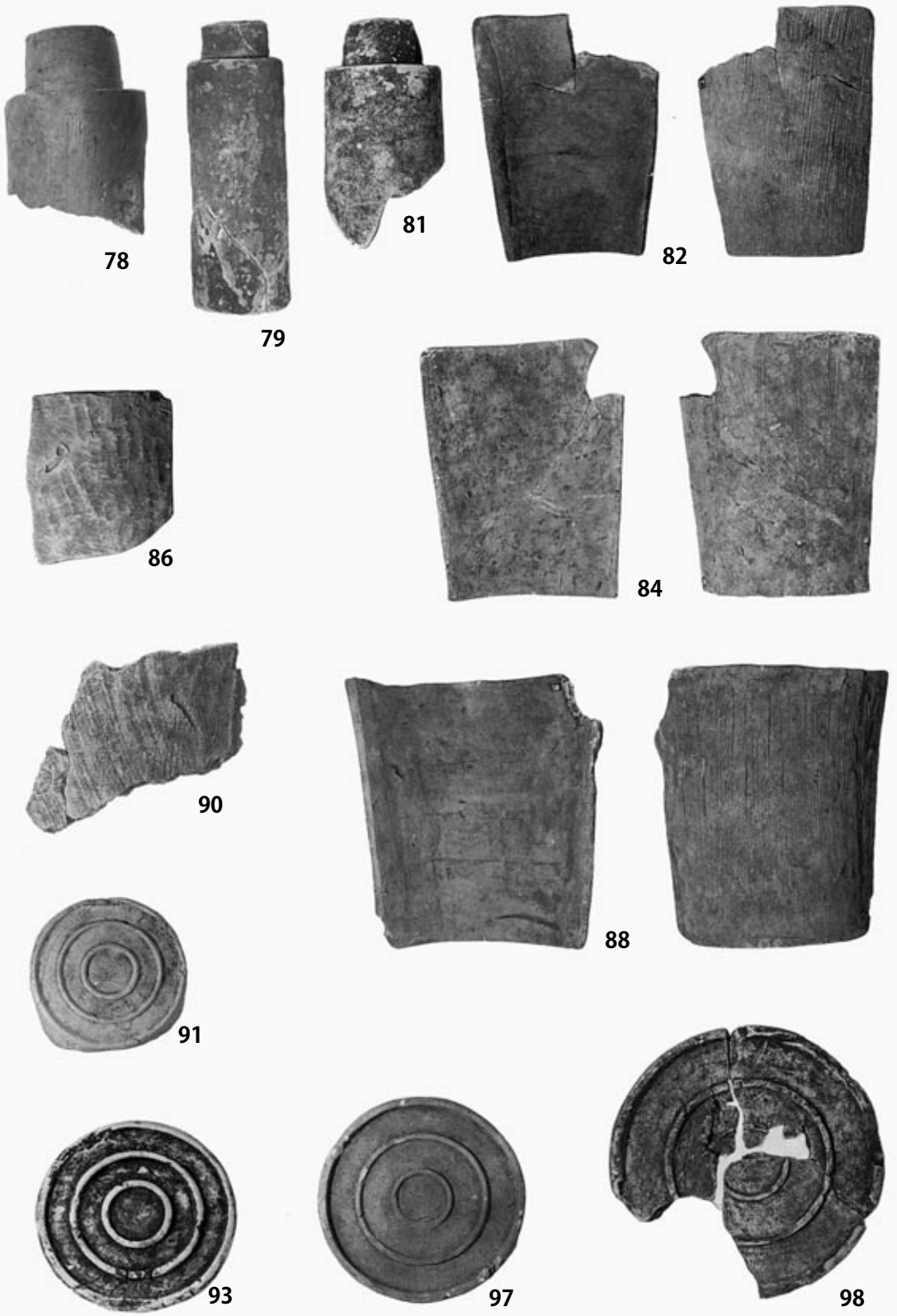
26

30

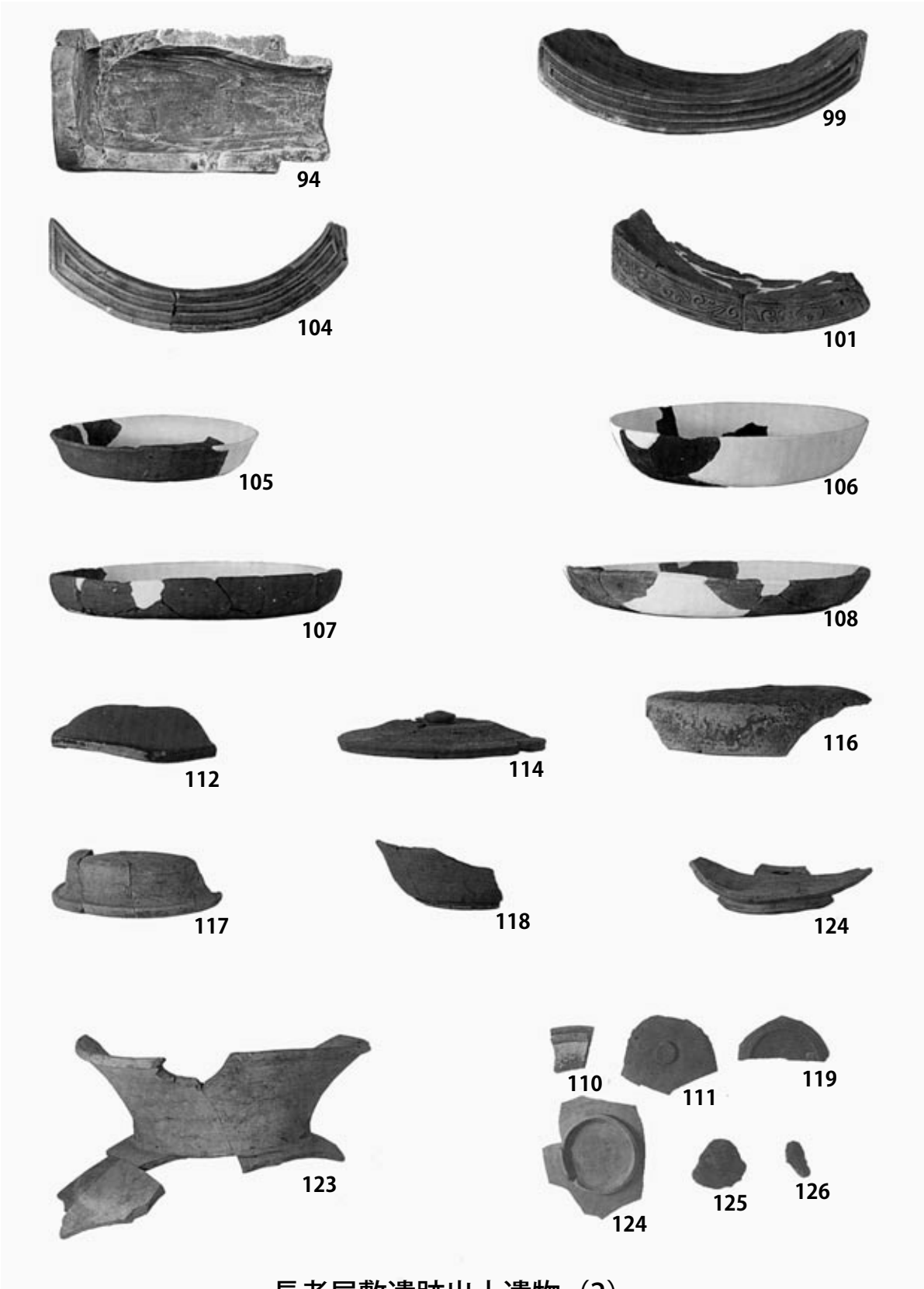
伊勢国分寺跡出土遺物（1）



伊勢国分寺跡出土遺物（2）



長者屋敷遺跡出土遺物（1）



長者屋敷遺跡出土遺物（2）

伊勢国分寺・国府跡
－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告－
1994 年 3 月 31 日

編集・発行　鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市神戸九丁目 11-15
TEL.0593(82)9031
印　　刷　オリエンタル印刷株式会社
安芸郡河芸町上野 2100